

北野遺跡(第5次)発掘調査概報

1996・3

三重県埋蔵文化財センター

例 言

- 1 本書は、三重県多気郡明和町^{たきぐんめいわちやうのみら}・明星^{めいせい}・本郷^{ほんかう}に所在する、北野遺跡^{きたの}の第5次調査の発掘調査の概要をまとめたものである。
- 2 本書は、平成7年度農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の第5分冊である。
- 3 調査にあたる費用は、その一部を国庫補助金を得て三重県教育委員会が、他は三重県農林水産部と三重県多気郡明和町が負担した。
- 4 調査は、平成7年6月から平成8年1月に実施した。調査の体制は以下の通りである。

調査主体	三重県教育委員会		
調査担当	三重県埋蔵文化財センター		
調査第一課 主事	竹田憲治、	越賀弘幸、	中川 明、伊藤裕之
技師	日栄智子		
研修員	袖岡直樹、松葉和也		
臨時技術補助員	山田康弘		
- 5 調査にあたっては、地元明和町^{めいわちやう}・明星^{めいせい}・本郷^{ほんかう}の方々、三重県農業開発公社、明星土地改良区、明和町教育委員会、三重県農林水産部農地整備課、松阪農林事務所からの協力を得た。
- 6 調査及び本書の執筆にあたっては、上村安生氏（斎宮歴史博物館）、酒井清治氏（財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団）、窯跡研究会の方々の指導・助言を得た。
- 7 遺構の実測・写真撮影は、調査担当者の他、三重県埋蔵文化財センター調査第一課の前川嘉宏、木野本和之、西出孝、筒井正明、船越重伸、西澤裕幸および荒木久貴（皇學館大學聴講生）が行った。
- 8 本書の作成業務にあたっては、三重県埋蔵文化財センター調査第一課および管理指導課の下記の業務補助員が補佐した。遺物写真の撮影、執筆、全体の編集は竹田が行った。

足立純子、有川芳子、石橋秀美、井村浩子、柿原清子、川口 愛、井田美奈子、楠 純子、倉田由起子、小林佳代子、須賀幸枝、杉原泰子、竹村千春、田中美樹、豊田幸子、富楽幸子、中川章世、中山豊子、西田衣里、西村秋子、浜崎佳代、早川陽子、堀内博子、松本春美、松月浩子、森島公子、柳田敬子
- 9 挿図の方位は、第1図遺跡位置図、第2図遺跡地形図、第3図調査区位置図に関しては真北を、それ以外の図に関しては国土調査法による座標北（第Ⅵ系）を用いた。なお座標北の方位は真北に対し東偏 $0^{\circ}21'$ 、磁北の方位は真北に対し西偏 $6^{\circ}10'$ （平成8年）である。
- 10 本書で用いた遺構表示記号は下記による。また遺構番号は、すべて通し番号とした。

S B	: 掘立柱建物	S D	: 溝	S F	: 土師器焼成坑
S H	: 竪穴住居	S K	: 土坑	S X	: 墓
- 11 写真図版の遺物番号は、遺物実測図の番号と対応している。写真図版は特に断らない限り縮尺不同である。
- 12 本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。
- 13 富山大学教授広岡公夫氏から、土師器焼成坑の考古地磁気測定についての論考を頂き、付編に掲載した。
- 14 スキャニングによるデータ取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

I. 前言	1
II. 層序と遺構	4
1. 層序	4
2. 遺構	4
(1) 弥生時代後期の遺構	4
(2) 古墳時代初めの遺構	10
(3) 飛鳥時代から奈良時代の遺構	11
III. 遺物	22
(1) 弥生時代後期の遺物	22
(2) 古墳時代初めの遺物	22
(3) 飛鳥時代から奈良時代の遺物	26
IV. 小結	30
(1) 銅鐸形土製品について	30
(2) 排水溝を継続的に利用する堅穴住居群について	30
(3) 土師器焼成坑について	33
V. 北野遺跡(第5次発掘調査)の考古地磁気年代(富山大学理学部地球科学教室 広岡公夫・森 京子)	35

写真図版目次

写真図版 1	調査区全景	43
写真図版 2	SH6、SH56、銅鐸形土製品出土状況	44
写真図版 3	SH19、SX5、SB98、SB120	45
写真図版 4	SF28、SF109、SF112、SF170、SF185、SF186、SF189	46
写真図版 5	出土遺物写真(1)	47
写真図版 6	出土遺物写真(2)	48

挿図目次

第1図	遺跡位置図	1
第2図	遺跡地形図	2
第3図	調査区位置図	3
第4図	遺構配置図	5
第5図	SH6 実測図・遺物出土状況図	6
第6図	SH35、SH56、SH19 実測図	7
第7図	S X 5 実測図、遺物出土状況図	8
第8図	SH32・SH33 実測図、SH33 竈実測図	11
第9図	SB61、SB98 実測図	12
第10図	SB120 実測図	13
第11図	SF28・57、SF109 実測図	14
第12図	SF112、SF170、SF185、SF186 実測図	15
第13図	SF189 実測図・遺物出土状況図（1）	16
第14図	SF189 実測図・遺物出土状況図（2）	17
第15図	出土遺物実測図（1）	23
第16図	出土遺物実測図（2）	24
第17図	出土遺物実測図（3）	25
第18図	出土遺物実測図（4）	26
第19図	A群竪穴住居変遷図	31
第20図	B群竪穴住居変遷図	32
第21図	土師器焼成坑の各部の名称	34
付 図	北野遺跡（第5次）遺構実測図	

表目次

第1表	竪穴住居一覧表（1）	9
第2表	竪穴住居一覧表（2）	10
第3表	方形周溝墓一覧表	10
第4表	土師器焼成坑一覧表	14
第5表	竪穴住居一覧表（3）	19
第6表	竪穴住居一覧表（4）	20
第7表	掘立柱建物一覧表（1）	20
第8表	掘立柱建物一覧表（2）	21
第9表	出土遺物観察表（1）	27
第10表	出土遺物観察表（2）	28
第11表	出土遺物観察表（3）	29

I. 前 言

三重県教育委員会では、国及び県にかかる各種公共事業に関して、各開発部局の事業を照会し、事業予定地内の文化財の確認と、その保護に努めている。

こうした中で、三重県埋蔵文化財センターでは、昭和63年度に三重県農林水産部農村整備課（当時）から、多気郡明和町大字養村・明星での県営ほ場整備事業の回答を受けた。

事業地内には、旧石器時代から中世の遺跡である北野遺跡(明和町遺跡番号228)が含まれていた^①。そこで当センターでは、遺跡の概要を知るために同年度に試掘調査を行い、4,620㎡に遺構が存在することを確認した。

その結果をもとに、当センターは、県農林水産部農村整備課と遺跡保存についての協議を行い、現状保存が困難な部分について平成2年度に第1次調査(3,500㎡)を行い、弥生時代後期から奈良時代の竪穴住居・掘立柱建物のほか、飛鳥時代から奈良時代の土師器焼成坑46基を検出した^②。

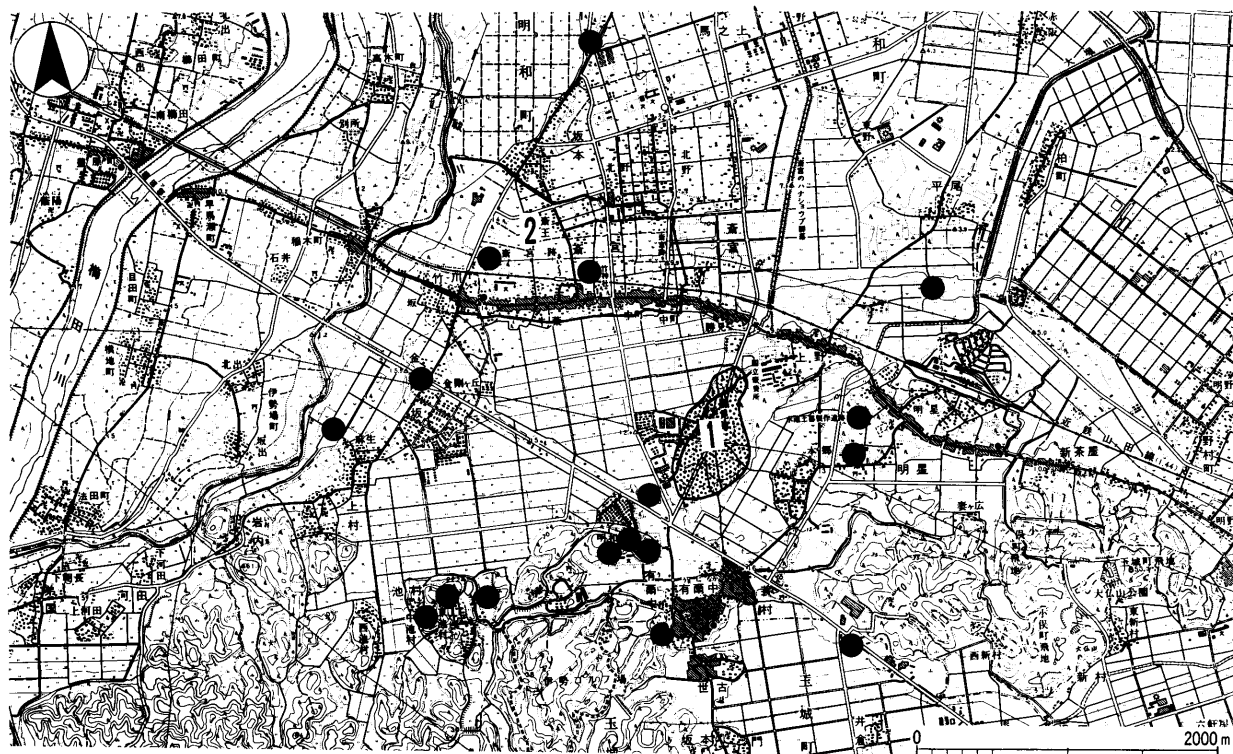
その後、ほ場整備事業の拡大に伴い、遺跡の範囲

を確認する必要性が生じたため、平成2年11月から12月に再度試掘調査を行い、遺構が濃密に存在することを確認した。この結果をもとに再度協議を重ね、現状保存が困難な部分について複数年度で発掘調査を行うことになった。

平成4年度に行った第2次調査(8,300㎡)では、弥生時代後期および飛鳥時代から奈良時代の竪穴住居・掘立柱建物などの集落跡のほか、古墳時代初めの方形周溝墓や古墳時代後期の古墳を検出した^③。また、土師器焼成坑を76基検出した。

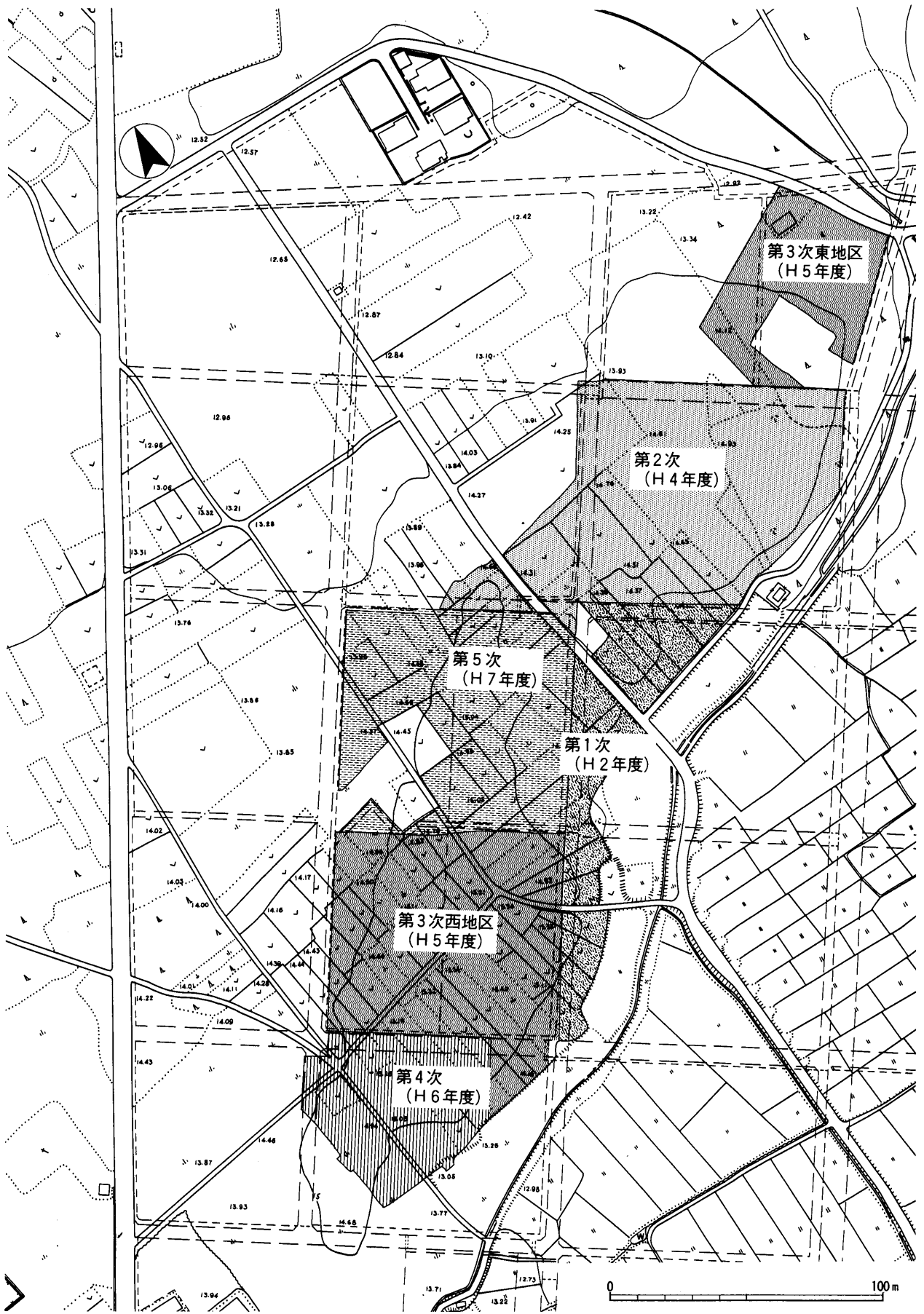
平成5年度に行った第3次調査(8,500㎡)では、弥生時代後期から奈良時代の竪穴住居や掘立柱建物などの遺構が最も濃密に分布する部分を調査した^④。土師器焼成坑を64基検出し、有孔広口筒形土器を多量に含む土師器焼成坑もみつかった。また、遺跡の南西部分では、これまで調査した北東側にはみられなかった弥生時代後期末から古墳時代初めの集落跡や平安時代末の掘立柱建物や墓も検出した。

第3次調査の結果、遺構が濃密に分布する範囲が



第1図 遺跡位置図(1:50,000)(国土地理院「松阪」「明野」1:25,000から)

1. 北野遺跡 2. 斎宮跡 ●印は土師器焼成坑が検出された遺跡



第3図 調査区位置図 (1:2,000)

当初の想定よりさらに南西側にひろがる可能性が高いこと、当初基盤層と判断していた黄褐色粘質土層に、旧石器時代の遺物が包含されていることが明らかになってきた。そこで、平成6年1月に上層遺構の南西側へのひろがり、下層の状況を把握するために試掘調査を行った。この結果、上層についてはこれまでの想定よりも南西側にも遺構がみられること、第3次調査区内の下層1,200㎡について、旧石器時代の遺物が包含されていることが判明した。

平成6年度に行った第4次調査(2,540㎡)では、弥生時代後期から奈良時代の集落跡、土師器焼成坑群の南西端を調査した。土師器焼成坑は28基検出され、この時点で本遺跡で検出された土師器焼成坑の

数は214基となった^⑤。

これと並行して、前年度の試掘で明らかになった第3次調査区の下層、第4次調査区の下層を調査し、ナイフ形石器や剥片などが出土した。

平成7年度は、第5次調査として、これまでの調査区のほぼ中央部(5,750㎡)を調査することになった。

調査区は、標高14.5mから15mの低丘陵に立地し、小地区O列あたりを境にして、それ以东は東に、以西は西に傾斜している。その標高差は東で約0.4m、西で約0.8mである。行政的には三重県多気郡明和町養村字東へべらに位置し、調査前の地目は畑地である。

Ⅱ．層序と遺構

1．層序

今回の調査区の基本的な層位は、第1層：灰色土(耕作土)、第2層：黄褐色粘質土(基盤層)で、遺構検出面は第2層上面である。耕作土上面から遺構検出面までの深さは平均して約20cmである。遺跡の南西側(第3次・第4次調査区)では、第2層中

に旧石器時代の遺物を含む。

調査区は、前言でも触れたように低丘陵に立地しているため、遺構検出面は、小地区O列あたりを境にして、それ以东は東に、以西は西に傾斜している。

2．遺構

今回の調査で検出した遺構は、竪穴住居61棟、掘立柱建物48棟、土師器焼成坑12基、方形周溝墓3基などである^⑥。(第1～7表)

遺構のほとんどは、低丘陵上の平坦部や東斜面(小地区O列以东)に立地するが、弥生時代後期の竪穴住居や方形周溝墓などには西斜面に立地しているものもある。

(1) 弥生時代後期の遺構

①竪穴住居

SH6(第5図、写真図版2)弥生時代後期の竪穴住居では、最も西に位置する。

東西4.5m、南北4.1mの方形で、検出面からの深さは最も深いところで0.34mである。南壁の中央付近に貯蔵穴がある。周溝は部分的にオーバーハングし、住居の西隅から暗渠状に排水溝がのびる。貼床・炉

は確認できなかった。

埋土の基本的な層位は上から明灰褐色土、黒褐色土、黄褐色土粒を含む褐色土である。

周溝の埋土から鉢(13)・蓋(15)が出土したほか、竪穴住居の埋土から高杯(9～11)・壺(14)・小型壺(12)・甕・銅鐸形土製品(24・25)が出土した。




SH35(第6図)東西4.2m、南北4.0mの方形で、検出面からの深さは最も深いところで0.23mである。南壁の中央付近に貯蔵穴がある。住居内にはほぼ全面に厚さ2cmほどの貼床がある。炉は2か所にみられる。

埋土から高杯・甕・砥石などが出土した。

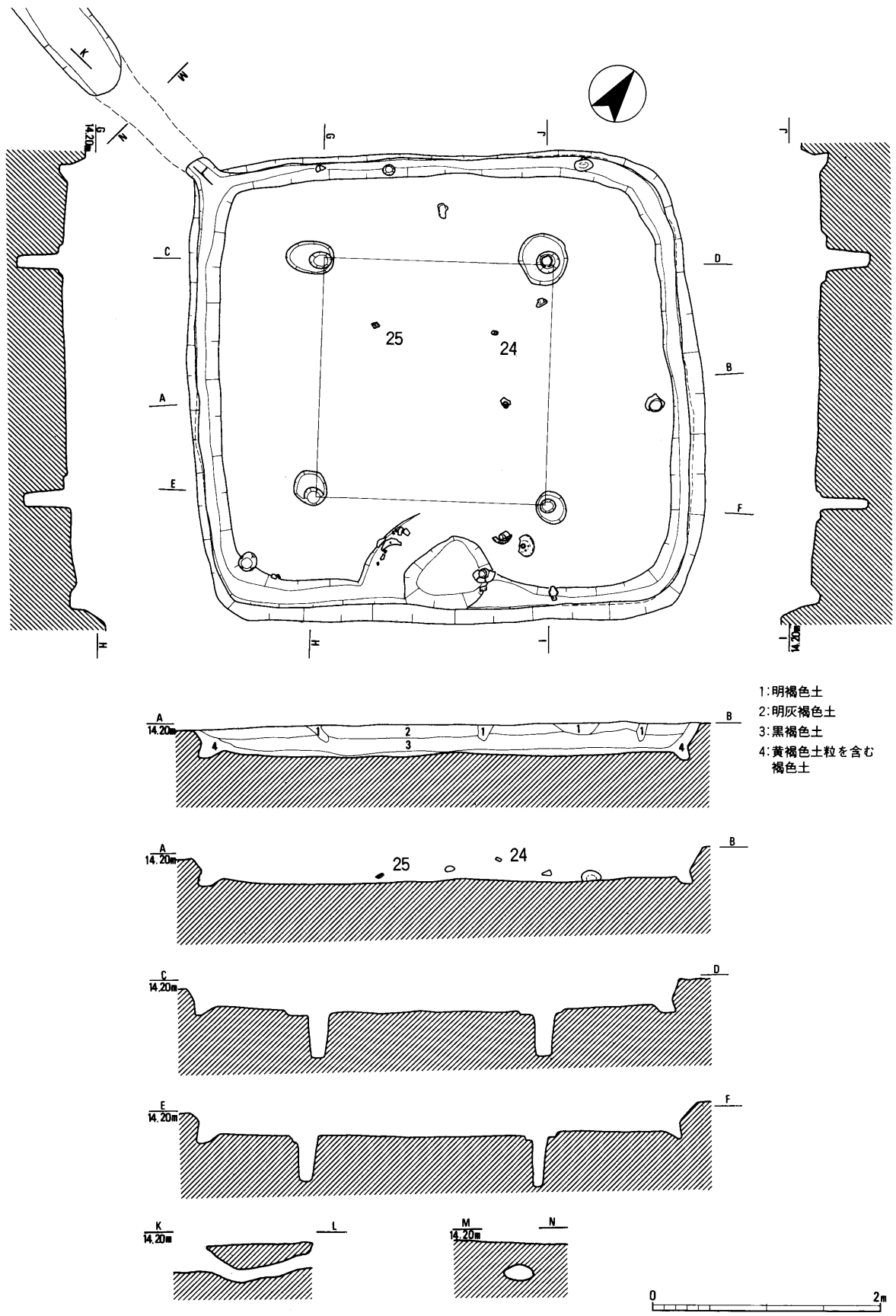
ほぼ前後すると思われる竪穴住居SH25とSH34、飛鳥時代の土師器焼成坑SF28に切られる。

SH56(第6図、写真図版2)東西5.2m、南北5.1mの方形で、検出面からの深さは、最も深いところで

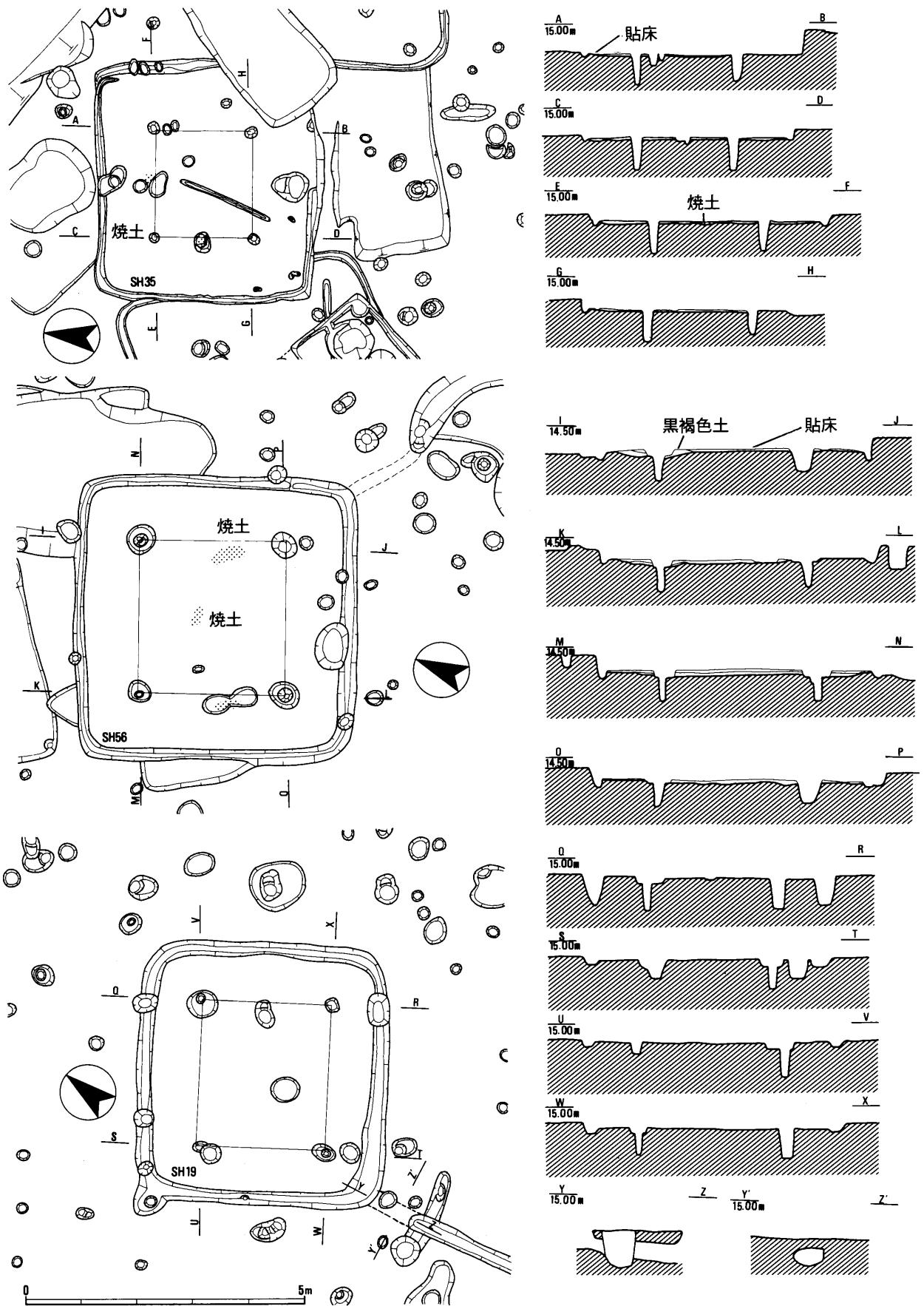


- | | | | |
|---|-------|---|--------|
|  | 竪穴住居 |  | 土師器焼成坑 |
|  | 掘立柱建物 |  | 土坑 |
|  | 方形周溝墓 |  | 溝 |

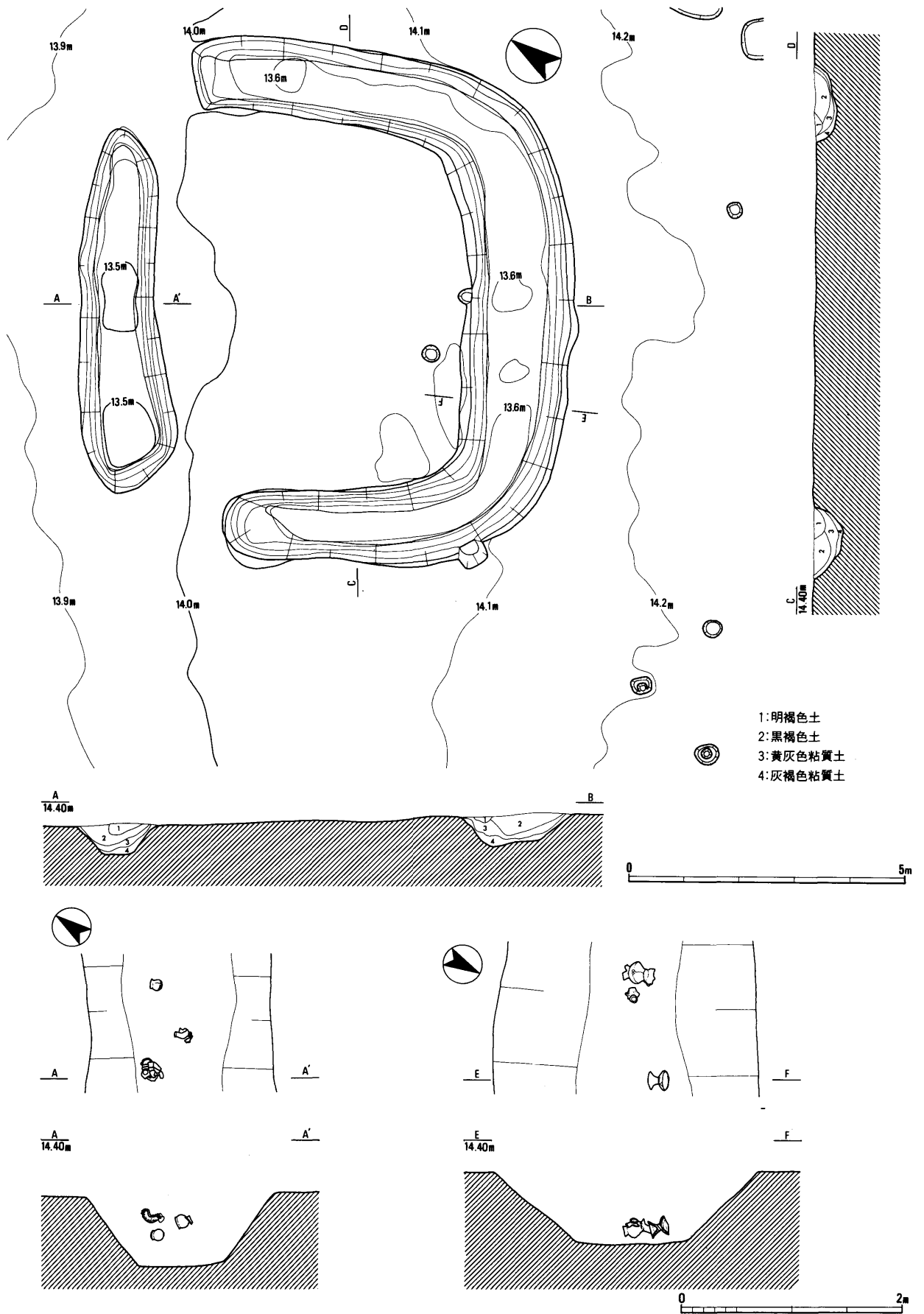
第4図 遺構配置図 (1:500)



第5図 SH6実測図・遺物出土状況図 (1:50)



第6图 SH35、SH56、SH19实测图 (1 : 100)



第7図 SX5実測図(1:100)、遺物出土状況図(1:50)

第1表 聖穴住居一覧表(1)

聖穴住居番号	地区	規模(m)			主軸方向	柱穴	周溝	排水溝	貯蔵穴	炉	時代	出土遺物	切り合い	備考
		東西	南北	深さ										
6	H2-3 I2-3	4.5	4.1	0.34	N38° W	○	○	○	○	×	弥生後期	Y:高杯、甕、壺、小型壺、鉢、蓋、銅鐸形土製品		
8	J3-4 K3-4	3.4	3.2	0.22	N41° W	×	×	×	○	○	弥生後期	Y:高杯、甕、台付甕、壺、小型鉢	SD13に切られる。	
14	L4 M3-4 N4	3.7	3.7	0.29	N25° W	○	×	×	○	×	弥生後期	Y:高杯、台付甕、壺		
17	L2 M2	3.7	4.6	0.23	N27° W	○	○	○	○	○	弥生後期	Y:甕、台付甕、壺	SD13・16に切られる。	第2次調査SH188
19	O6-7 P6-7 Q6-7	4.7	4.5	0.16	N35° W	○	○	○	×	×	古墳初め	H:高杯、甕、壺、手焙形土器		
23	N2 O2	4.5	4.2	0.32	N14° W	○	×	×	×	○	弥生後期	Y:甕	SB247に切られる。	第2次調査SH185
25	P2 Q2	3.6	—	0.16	N39° E	○	×	○	○	×	弥生後期	Y:甕、壺	SH30・35を切る。	
30	Q2	3.0	3.2	0.37	N25° W	×	×	○	×	×	弥生後期	Y:小片	SH25に切られる。	第2次調査SH184
34	P3 Q3	—	4.5	0.06	N29° W	○	○	×	○	○	弥生後期	Y:高杯、甕、台付甕、壺	SH35を切る。SH27・32・33に切られる。	
35	Q2-3 R2-3	4.2	4.0	0.23	N9° W	○	○	×	○	○	弥生後期	Y:高杯、台付甕、砥石	SH25・34、SF28に切られる。	
45	R2-3 S2-3	4.5	—	0.13	N 6° W	○	○	×	○	○	弥生後期	Y:高杯、台付甕、壺、砥石	SF28・57に切られる。	
46	S2 T2	—	—	0.20	N38° W	×	○	×	×	×	弥生後期	Y:台付甕、壺、小型壺		
56	T7 U6-8 V7-8	5.2	5.1	0.32	N20° W	○	○	○	○	○	弥生後期	Y:高杯、甕、台付甕、壺、台付壺、小型壺、ミニチュア甕	SK88を切る。SK55、SB234に切られる。	
65	O9-10 P9-10	5.0	5.0	0.04	N36° W	○	○	○	×	×	弥生後期末～古墳初め	Y:高杯、台付甕	SD13・60に切られる。	
74	P11 Q10-12 R11-12	5.0	4.8	0.23	N22° W	○	○	○	×	○	弥生後期末～古墳初め	Y:高杯、甕、台付甕、壺	SH76・96、SD13・60・78に切られる。	
85	V8-10 W8-10	4.9	4.4	0.30	N26° W	○	○	?	○	×	弥生後期	Y:高杯、甕、壺	SK94、SX86に切られる。	第1次調査SH21
92	U12-13 V12-13	4.6	4.7	0.17	N14° W	○	○	○	○	×	弥生後期	Y:高杯、甕、台付甕、壺、土鉢	SB100に切られる。	
96	Q12-13 R12-13	—	4.4	0.10	N24° W	○	○	×	×	×	弥生後期末～古墳初め	Y:高杯、甕	SH74を切る。SH76・79、SD13に切られる。	
104	O14-15 P14-15	5.6	5.1	0.24	N 2° W	○	○	○	○	○	弥生後期	Y:高杯、甕、台付甕、壺	SB120、SD78に切られる。	
106	P16-17 Q15-17	4.2	4.8	0.08	N16° W	○	○	×	○	○	弥生後期?	Y:甕、壺	SH121、SK105・118に切られる。	
131a	O20-21 P20-22 Q20-22	5.5	5.6	0.20	N30° E	○	○	○	×	×	弥生後期末～古墳初め		SH195を切る。SB136に切られる。	
131b	O20-21 P20-22 Q20-22	5.2	5.0	◇	◇	○	○	○	×	×	弥生後期末～古墳初め	Y:高杯、台付甕、S字甕、台付壺 焼成粘土塊、軽石	◇	SH131aの建て替え
133	O22-23 P22-23	5.2	4.9	0.16	N 4° W	○	○	○	○	○	弥生後期	Y:高杯、甕、台付甕、壺、小型壺、甌、鉢 砥石	SH132、SK134に切られる。	
145	R16-17 S16-17	5.8	6.0	—	N 8° E	○	○	○	×	×	弥生後期末～古墳初め	Y:甕	SK143に切られる。	
168	T17-18 U17-18	4.6	4.6	0.25	N40° E	○	○	○	×	×	弥生後期末～古墳初め	Y:高杯、甕	SH192に切られる。	
182	S18-19 T18-19	4.4	4.3	0.15	N19° W	○	○	○	×	○	弥生後期末～古墳初め	Y:高杯、甕、壺、ミニチュア壺	SF185に切られる。	
188a	T20 U20-21 V20-21	5.4	5.4	0.16	N 6° W	○	○	○	○	○	弥生後期		SD190・202に切られる。	
188b	◇	◇	◇	◇	◇	○	○	○	○	○	弥生後期	Y:高杯、甕、台付甕、壺	◇	SH188aの建て替え

第2表 竪穴住居一覧表(2)

竪穴住居番号	地区	規模(m)			主軸方向	柱穴	周溝	排水溝	貯蔵穴	炉	時代	出土遺物	切り合い	備考
		東西	南北	深さ										
195	P21 Q21-22 R21-22	4.9	4.6	0.23	N 9° W	○	○	○	○	○	弥生後期	Y:高杯、台付甕、壺、台付壺、砥石、軽石	SH131・194に切られる。	
197	R22-23 S22-23	5.4	5.3	0.10	N32° W	○	○	○	×	○	弥生後期	Y:甕、台付甕、壺、ミニチュア甕		第3次調査SH88
198	V21 W20-21	—	—	—	N43° E	○	○	×	○	×	弥生後期		SH196、SD190・199・203に切られる。	
205	V14-15 W14-15	—	5.0	0.04	N18° E	○	○	○	×	×	弥生後期		SB218、SD60に切られる。	第1次調査SH53
206	W19-20	4.9	4.8	0.25	N21° W	○	○	○	○	×	弥生後期	Y:高杯、壺	SF186に切られる。	第1次調査SH28
207	S21-22 T21-22	5.1	5.1	0.16	N 3° W	○	○	○	×	×	弥生後期末～ 古墳初め	Y:甕、壺	SD212を切る。 SH219に切られる。	

Y: 弥生土器 H: 土師器

第3表 方形周溝墓一覧表

方形周溝墓	地区	規模(m)			主軸方向	出土遺物	切り合い	備考
		長辺	短辺	周溝の深さ				
5	F4-6 G4-6 H4-6	16.0	14.5	0.6	N34° W	高杯、台付甕、壺、ミニチュア台付甕、ミニチュア壺		
8 6	U10 V9-11 W10 -11	5.6	4.8	0.22	N84° E	壺	SH85を切る。SD67に切られる。SX91との切り合いは不明。	かなり削平を受ける
9 1	T9-10 U8-10 V9 -10	5.2	5.0	0.11	N57° E		SH87に切られる。SD67に切られる。SX86との切り合いは不明。	かなり削平を受ける

0.32mである。南壁の中央やや西よりに貯蔵穴がある。住居の東隅から暗渠状に排水溝がのびるが、その形状を確認することはできなかった。住居内にはほぼ全面に厚さ2cmほどの貼床がある。炉は3か所にみられる。

柱穴の埋土から台付壺(19)がほぼ完形で出土した。その他、竪穴住居の埋土からは弥生土器や土師器が出土したが、これらは竪穴住居廃絶後の投棄によるものである。

飛鳥時代の土坑SK55と飛鳥～奈良時代の掘立柱建物SB234に切られ、ほぼ同時期の土坑SK88を切る。

②方形周溝墓

SX5(第7図、写真図版3)調査区の北西端付近で、周溝のみを検出した。

周溝は溝の芯々間を計測すると東西16.0m、南北14.5mで、検出面からの深さは、最も深いところで0.6mである。周溝の北西および南西の隅部分が途切れる。

周溝埋土の層位は第1層：明褐色土、第2層：黒褐色土、第3層：黄灰色粘質土、第4層：灰褐色粘質土である。第2層からは高杯(1)・台付甕(3)・壺・ミニチュア台付甕(4)・ミニチュア壺(5)が、第3層からは高杯(2)・壺(8)が出土した。

(2) 古墳時代初めの遺構

①竪穴住居

SH19(第6図、写真図版3)東西4.7m、南北4.5mの方形で、検出面からの深さは、最も深いところで0.16mである。住居の南隅から暗渠状に排水溝がのびる。排水溝は約30mにもわたり掘削されている。貼床・炉は確認できなかった。

床面直上の数か所から炭化物が出土したほか、周溝の埋土から手焙形土器(23)が、竪穴住居の埋土から高杯(20・21)・甕・壺(22)が出土した。

②掘立柱建物

9棟検出した。建物の時期は弥生時代後期に遡る可能性もある。

(3) 飛鳥時代から奈良時代の遺構

① 竪穴住居

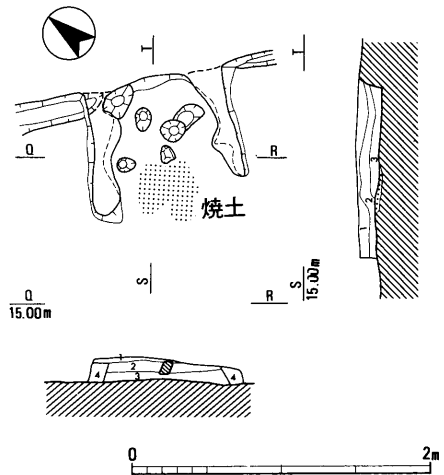
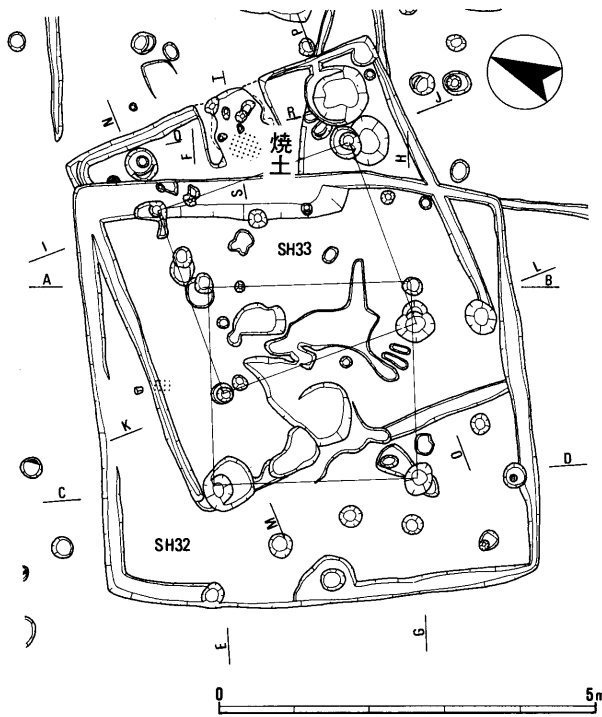
SH32 (第8図) 東西5.7m、南北5.7mの方形で、検出面からの深さは最も深いところで0.05mである。貯蔵穴はみられなかった。北壁の中央付近に竈の痕跡の焼土と支石がある。

埋土から土師器碗・高杯・甕・長胴甕・甑などが出土した。

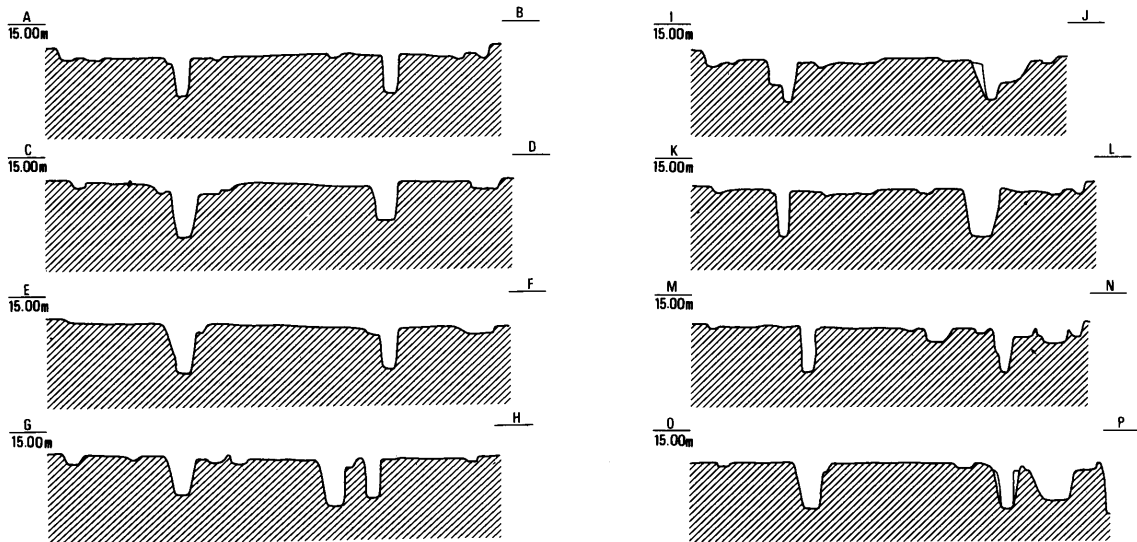
弥生時代後期の竪穴住居SH34、ほぼ前後する時期の竪穴住居SH27とSH33を切る。

SH33 (第8図) 東西4.6m、南北5.1mの方形で、検出面からの深さは最も深いところで0.12mである。東壁の中央付近に竈があり、その東側には貯蔵穴がある。

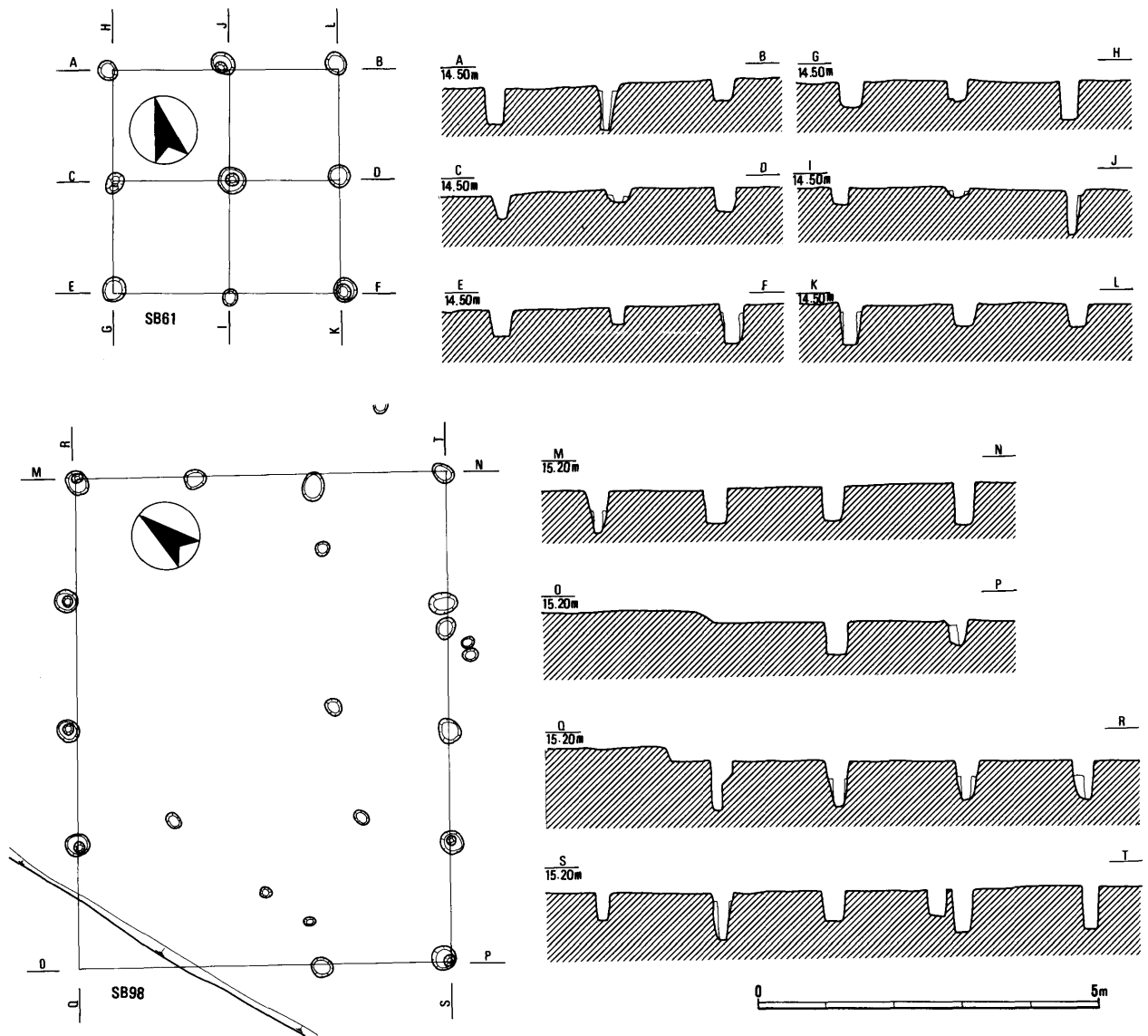
埋土から土師器碗・甕・長胴甕・甑が出土した。



- 1: 炭・焼土粒を含む黄褐色粘質土
- 2: 暗褐色土
- 3: 黄褐色粘質土粒を含む暗褐色粘質土
- 4: 灰褐色土粒を含む黄褐色粘質土



第8図 SH32・SH33 実測図 (1:100)、SH33 竈実測図 (1:50)



第9図 SB61、SB98 実測図 (1 : 100)

弥生時代後期の竪穴住居SH34を切り、ほぼ前後する時期の竪穴住居SH32に切られる。竪穴住居SH27との前後関係は不明である。

②掘立柱建物

SB61 (第9図) 2間×2間の建物で、建物の規模は3.3m×3.3mである。柱間は1.65mの等間である。正方形の建物であるため、棟方向は不明であるが、東西棟とすれば棟の方向はN26° Eである。中央の柱穴が浅い。

柱穴から土師器碗が出土した。

SB98 (第9図、写真図版3) 4間×3間の建物で、建物の規模は桁行7.2m、梁行5.4mである。桁行の柱間は、西側が1.8mの等間であるが東側は不等間(北東隅から1.95m-1.8m-1.65m-1.8m)である。梁行の柱

間も不等間(西北隅から1.8m-1.65m-1.95m)である。棟方向はE37° Nである。

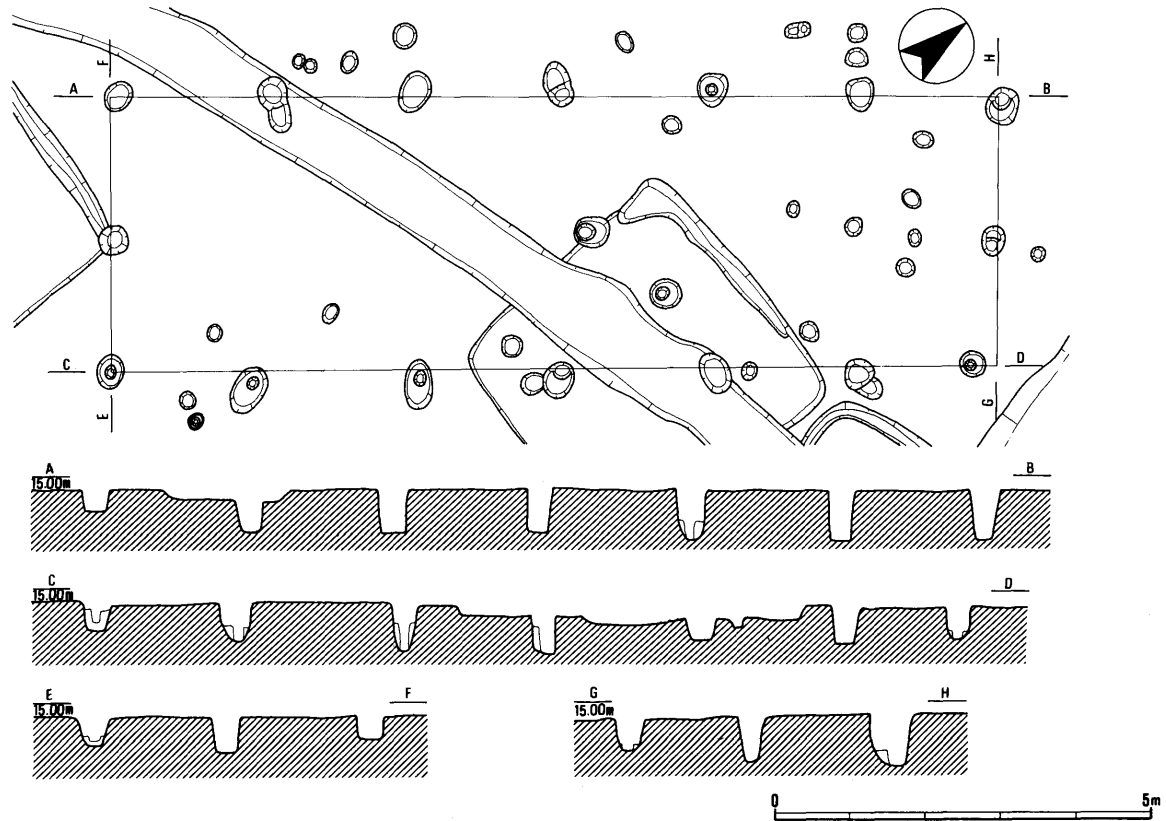
SB120 (第10図、写真図版3) 6間×2間の非常に長い建物である。建物の規模は桁行11.6m、梁行3.6mで、柱間は桁行・梁行とも不等間である。棟方向はN37° Eである。

柱穴から土師器、須恵器の小片が出土した。

柱穴が古墳時代初めの竪穴住居SH104、古墳時代後期の竪穴住居SH79を切り、飛鳥時代の溝SD78に切られる。

③土師器焼成坑^⑦

SF28 (第11図、写真図版4) 長軸3.75m、短軸1.6mの隅丸の三角形で、検出面からの深さは最も深い所で0.23mである。奥に近い壁面と床面に強く被熱す



第10図 SB120 実測図 (1:100)

る部分がみられるが、床面から壁面への立ち上がり部分には、被熱する部分はあまりみられない。先端部分にも被熱する部分がみられるが、これは先行する土師器焼成坑SF57の床面や壁面であろう。また、床面から側壁への立ち上がり部分に沿うようにして炭化木が出土した。

埋土は黒褐色土で、分層はできなかった。

埋土から土師器碗(26)・甕(29・30)・鍋(31)・甑・土錘(27・28)・焼成された粘土塊などが出土した。出土遺物のほとんどは土師器の細片で、ウロコ状に剝離したものや断面まで黒変しているものが多い。

弥生時代後期の竪穴住居SH35・SH45と飛鳥時代の土師器焼成坑SF57を切る。

SF57(第11図、写真図版4) 土師器焼成坑の床面しか確認できなかった。そのため、規模や形態は不明であるが、SF28と連続して構築されていた可能性が高い。

SF28に切られ、SH45を切っているが、SH45との切り合いは不明瞭であった。

SF39 削平を受けており、形状や規模は不明である。床面の被熱する部分のみを検出した。

若干残っていた埋土から土師器碗・甕などが出土した。

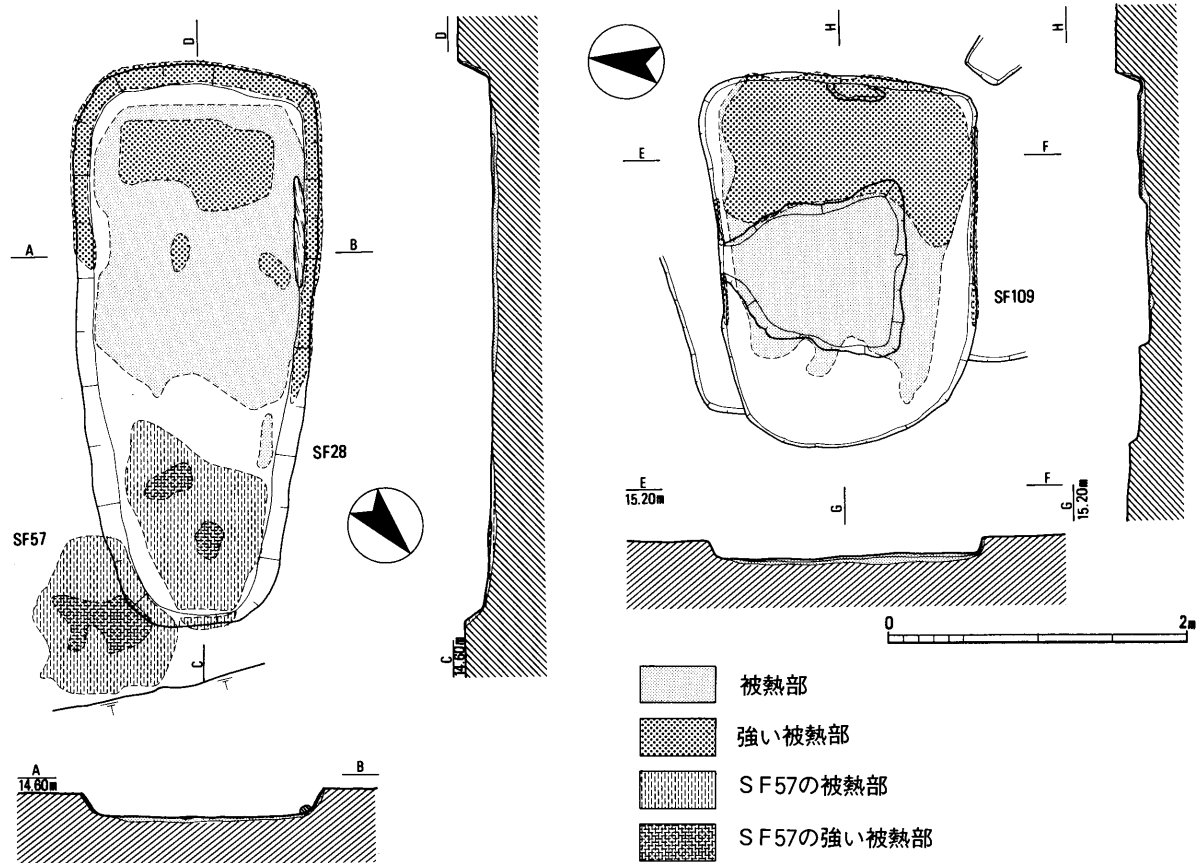
SF109(第11図、写真図版4) 先端部分が削平を受けており、形状や規模は不明である。検出面からの深さは最も深い所で0.13mである。奥に近い壁面と床面に強く被熱する部分がみられる。

中央部や奥壁近くに土坑や窪みがみられるが、土師器焼成坑に伴うものではない。

埋土は焼土粒を含む暗褐色土で、分層はできなかった。埋土から土師器甕(36)、焼成された粘土塊が出土した。

飛鳥時代の竪穴住居SH108とSH110を切っている。SF112(第12図、写真図版4)長軸4.4m、短軸2.05mの隅丸の三角形で、検出面からの深さは最も深い所で0.26mである。比較的先端近くまでの床面と壁面に強く被熱する部分がみられ、特に強く被熱する部分では、地山が深さ6cmも焼けている。

先端部分に浅い土坑状の窪みや溝がみられるが、

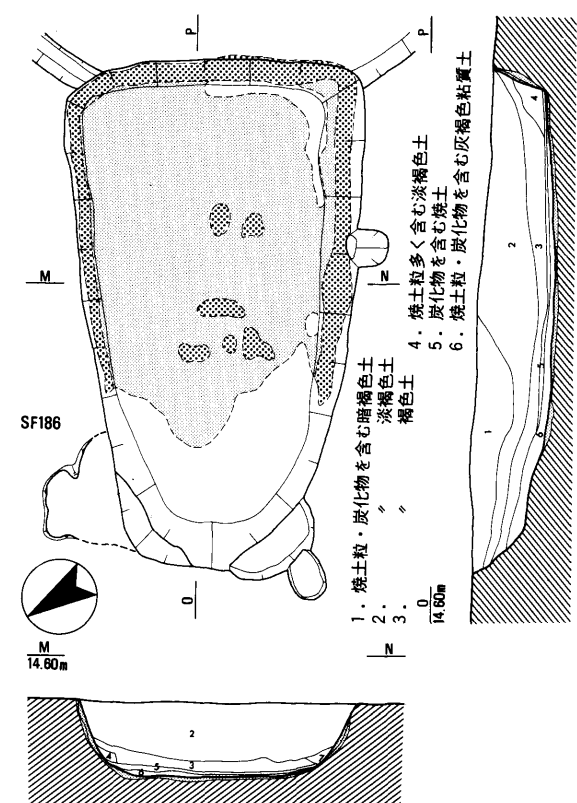
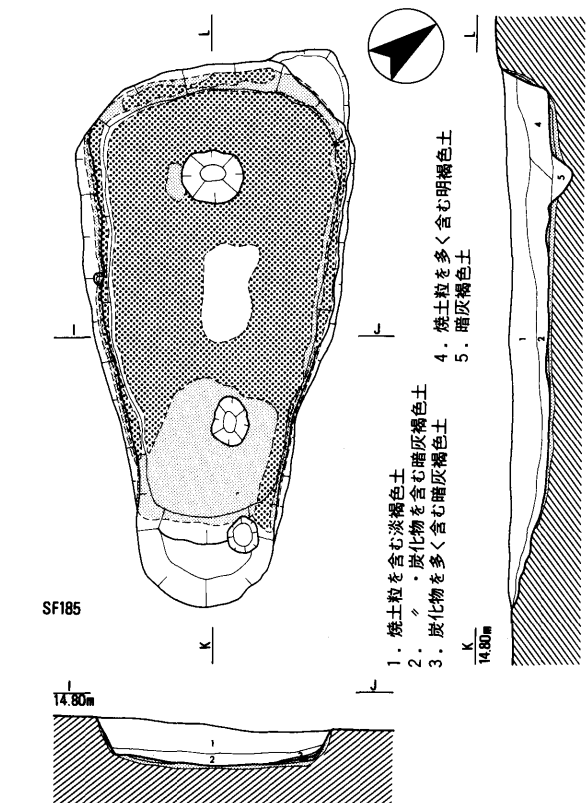
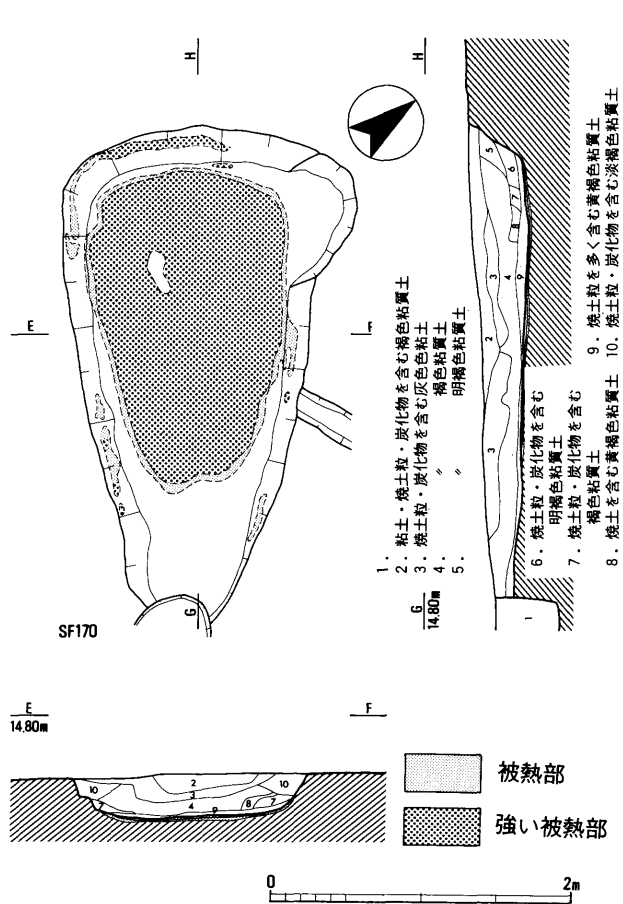
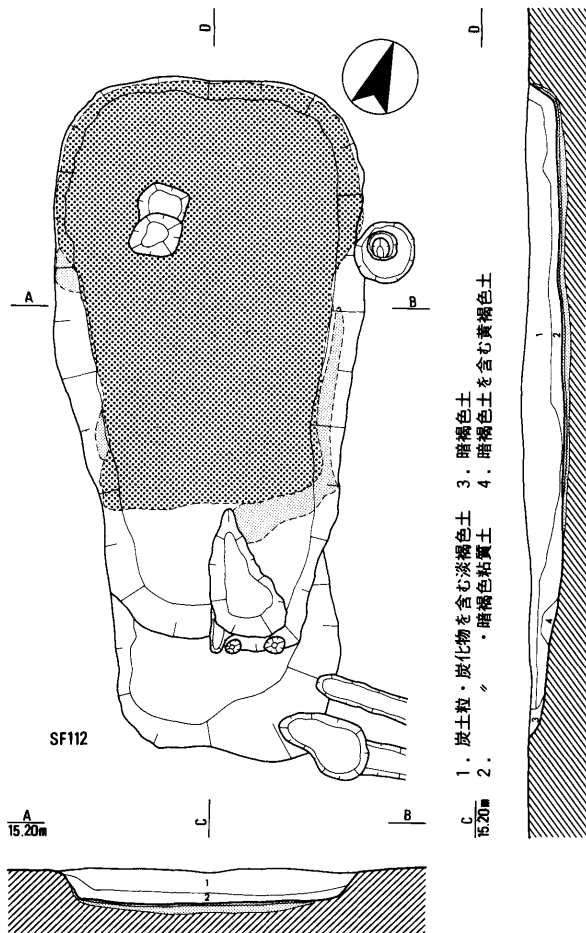


第11図 SF28・57、SF109実測図 (1:50)

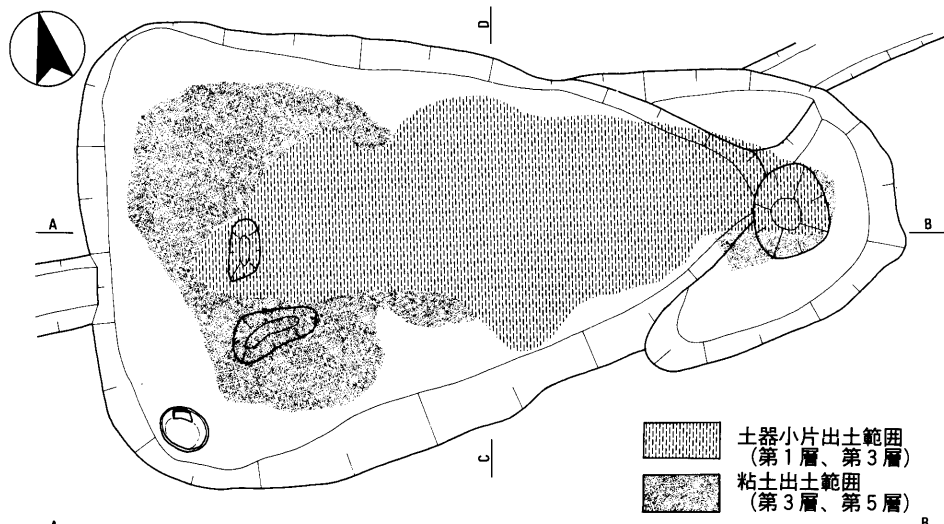
第4表 土師器焼成坑一覧表

焼成坑番号	地区	規模 (m)			主軸方向	出土遺物	切り合い	備考
		長軸	短軸	深さ				
28	R2-3	3.75	1.60	0.23	N137° W	H:碗、甕、甌、把手、土錘 焼成粘土塊	SH35・45、SF57を切る。	
39	R4-5	-	-	-	N35° E	H:碗、甕、把手	SH26との切り合い不明。	削平により形状・規模不明
57	R2	-	-	-	-		SH45を切る。SF28に切られる。	削平により形状・規模不明
109	L18、M18	-	-	0.13	N78° E	H:甕、焼成粘土塊	SH108 を切る。	削平により形状・規模不明
112	M19、20 N20	4.40	2.05	0.26	N20° W	H:碗、甕、鍋、把手 S:杯蓋	SB114 に切られる。	
170	S14、T14	3.30	1.60	0.34	N50° W	H:碗、甕、甌、土錘 S:杯	SK152・157 に切られる。	先端部土坑により破壊
183	W18、19	3.80	2.00	0.18	N44° E	H:碗、鍋、甌 S:小片	SK187 を切る。	第1次調査SF62
184	V19	-	-	-	-			削平により形状・規模不明
185	S19	3.65	1.85	0.35	N53° W	H:碗、高杯、甕、長胴甕、鍋、土錘 S:杯身、杯蓋、甌	SH182 を切る。SB242 に切られる。	
186	V20、W20	3.40	2.00	0.54	N120° E	H:碗、甕、甌、把手、土錘 S:杯身	SH206 を切る。	
189	T22、U22	1.80	1.20	0.27	N85° W	H:碗、杯、皿、高杯、甕、甌 有孔広口筒形土器 S:杯身、杯蓋	SD191 を切る。	
208	T21、U21	-	-	-	-	H:碗、甕		削平により形状・規模不明

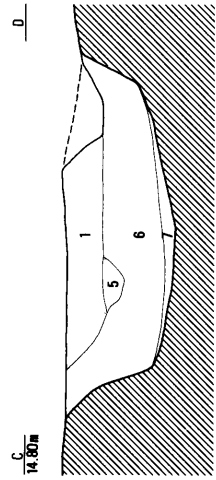
H:土師器 S:須恵器



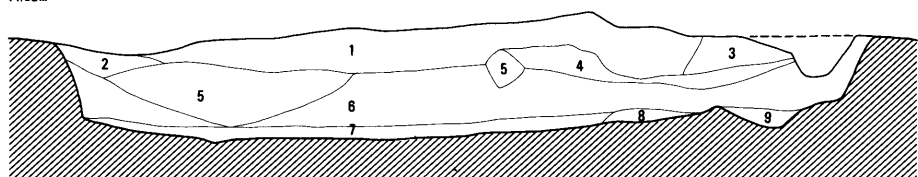
第12図 SF112、SF170、SF185、SF186測定図 (1 : 50)



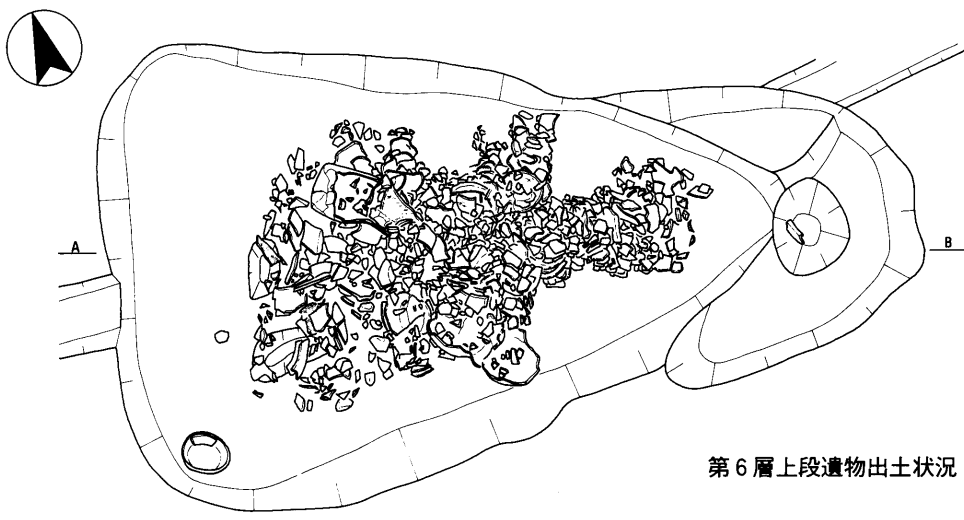
■ 土器小片出土範囲
 (第1層、第3層)
 ■ 粘土出土範囲
 (第3層、第5層)



A
14.80m

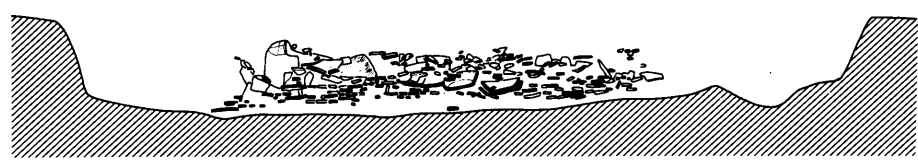


- 第1層：土器小片を多く含む
褐色粘質土
- 第2層：淡褐色粘質土
- 第3層：灰白色粘土
- 第4層：灰白色粘土を含む
粘質土
- 第5層：灰白色粘土
- 第6層：土器片を多く含む
淡褐色粘質土
- 第7層：焼土粒炭化物を多く
含む褐色粘質土
- 第8層：黒色炭化物
- 第9層：淡黄褐色土（先行す
るピット埋土）

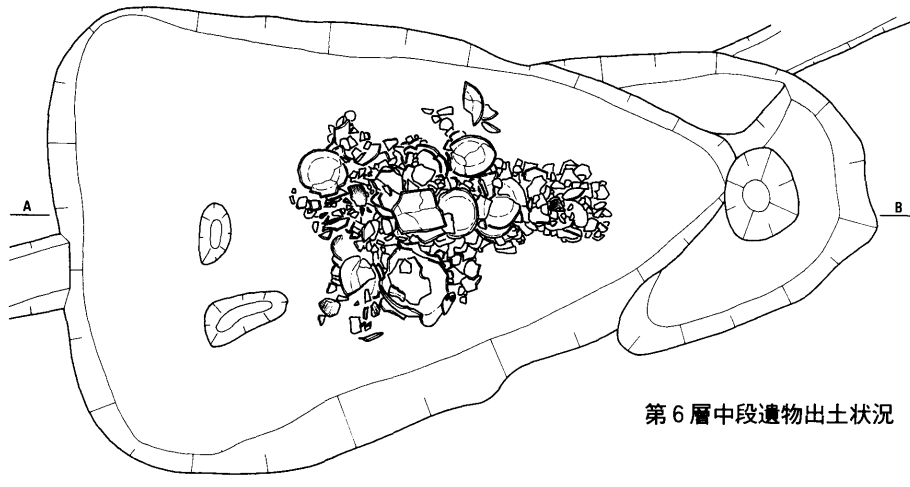


第6層上段遺物出土状況

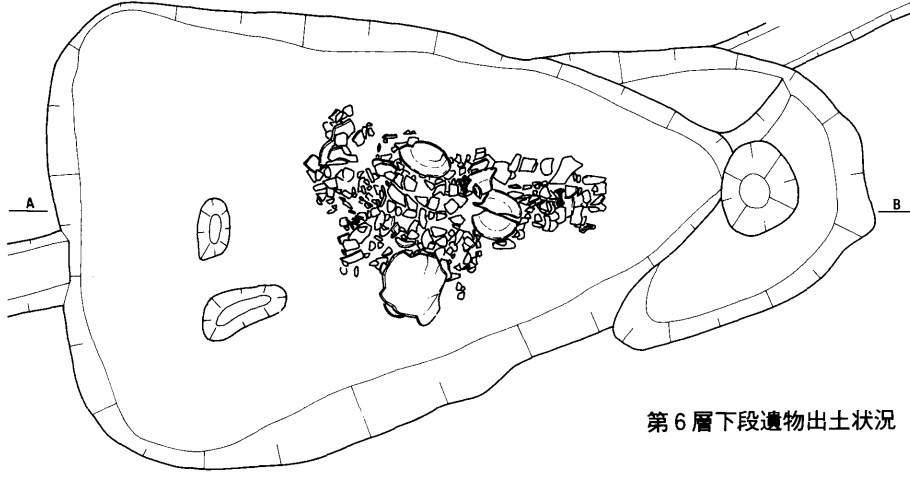
A
14.80m



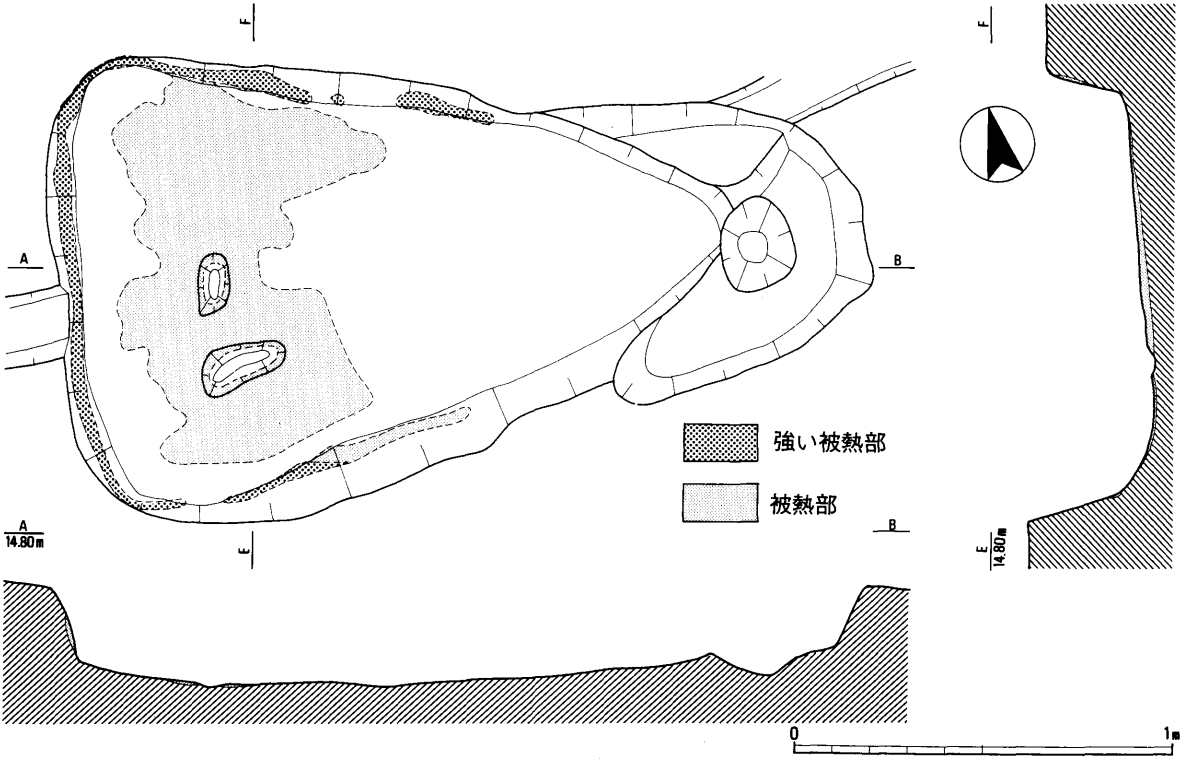
第13図 SF189実測図・遺物出土状況図(1) (1 : 20)



第6層中段遺物出土状況



第6層下段遺物出土状況



第14図 SF189実測図・遺物出土状況図(2)(1:20)

これは土師器焼成坑に伴うものではない。

埋土から土師器碗・甕(37)・鍋、須恵器杯蓋などが出土した。

ほぼ同時期の溝SD127を切り、掘立柱建物SB114に切られる。

SF170 (第12図、写真図版4) 先端部分をほぼ同時期の土坑SK157に切られるため、長軸の長さは不明であるが、残存する長軸3.3m、短軸1.6mの隅丸の三角形で、検出面からの深さは最も深い所で0.34mである。比較的先端近くまでの床面に強く被熱する部分がみられるが、壁面には被熱する部分はあまりみられない。

埋土の層位は第12図のとおりであるが、このうち第9層は、焼土粒や炭化物を多く含む粘質土であり、ある時期の床面であった可能性がある。また、埋土中にみられる粘土は、土器とともに廃棄されたものである。

埋土から土師器碗・甕(32・33)・甗、土錘(34)、須恵器杯などが出土した。

SF183 第1次調査のSF62と同一の遺構である。

長軸3.8m、短軸2.0mの隅丸の三角形で、検出面からの深さは最も深い所で0.18mである。奥に近い壁面と床面に強く被熱する部分がみられる。

土師器焼成坑内にピットがみられるが、これは土師器焼成坑に伴うものではない。

埋土から土師器碗・鍋・甗が出土した。

SF184 削平を受けており、形状や規模は不明である。床面の被熱する部分のみを検出した。

SF185 (第12図、写真図版4) 長軸3.65m、短軸1.85mの隅丸の三角形で、検出面からの深さは最も深い所で0.35mである。比較的先端近くまでの壁面と床面に強く被熱する部分がみられる。

土師器焼成坑内にピットがみられるが、土師器焼成坑に伴うものではない。また、奥壁近くのピットは、土層の状況から、土師器焼成坑に先行するものであるが、ピット埋土の上面はあまり被熱していなかった。

埋土から土師器碗(38・39)・高杯(40)・甕・長胴甕・鍋(44~46)・甗、土錘(35)、須恵器杯身(41・42)・杯蓋・踵(43)が出土したが、出土遺物のほとんどは土師器の細片で、ウロコ状に剥離したも

のが目立つ。

弥生時代後期末から古墳時代初めの堅穴住居SH182を切り、飛鳥時代から奈良時代の掘立柱建物SB242に切られる。

SF186 (第12図、写真図版4) 他の土師器焼成坑が斜面の下に先端を向けて構築されているのに対し、斜面の上に先端を向けて構築されている。

長軸3.4m、短軸2.0mの隅丸の三角形で、検出面からの深さは最も深い所で0.54mである。奥に近い壁面に強く被熱する部分がみられるが、床面は熱を受けているものの焼け方は壁面にくらべると弱い。

埋土の層位は第12図のとおりであるが、このうち第5層は、炭化物を含む焼土層で、ある時期の床面であった可能性がある。

埋土から土師器碗(47・48)・甕(49~51)・甗、土錘、須恵器杯身などが出土したが、出土遺物のほとんどは土師器の細片で、ウロコ状に剥離したものや断面まで黒変しているものが多い。

弥生時代後期の堅穴住居SH206を切る。

SF189 (第14・15図、写真図版4) 長軸1.8m、短軸1.2mの隅丸の三角形で、他の土師器焼成坑にくらべて小形で、側壁の平面形も直線的である。

検出面からの深さは最も深い所で0.27mである。奥に近い壁面に強く被熱する部分がみられるが、床面は熱を受けているものの焼け方は壁面にくらべると弱い。また、床面から壁面への立ち上がり部分には、被熱する部分はあまりみられない。先端部分に土坑があるが、これは土師器焼成坑と同時に埋まったもので、土師器焼成坑に伴うものではないと思われる。また、奥壁近くにピット状の窪みがみられるが、土師器焼成坑に伴うものではない。

埋土の層位は第12図のとおりである。埋土中にみられる粘土は、土器とともに廃棄されたものである。また、第6層からは、土師器碗(52~61)・皿(62・63)・高杯(64)・甕(65)・有孔広口筒形土器(66)などが一括して出土した。

溝SD191を切る。

SF208 削平を受けており、形状や規模は不明である。床面の被熱する部分のみを検出した。

若干残っていた埋土から土師器碗・甕などが出土した。

第5表 翌穴住居一覧表(3)

翌穴住居番号	地区	規模(m)			主軸方向	柱穴	周溝	排水溝	貯蔵穴	竈	時代	出土遺物	切り合い	備考
		東西	南北	深さ										
10a	I7-8 J7-8	3.9	4.4	0.16	N17° W	○	○	×	○	○	飛鳥		SD11に切られる。	
10b	〃	〃	〃	〃	〃	○	○	×	○	○	飛鳥	H:碗、甕、把手	〃	SH10aの建て替え
26	Q5-6、S5-6、R5-6	5.2	5.4	0.10	N32° E	○	○	○	×	×	飛鳥	H:碗、高杯、甕、長胴甕 S:壺、甕	SB233に切られる。	
27a	Q3-4 S3-4 R3-4	4.9	5.7	0.05	N14° W	○	○	×	○	○	飛鳥		SH34を切る。SH32に切られる。	
27b	〃	〃	〃	〃	〃	○	○	×	○	○	飛鳥	H:甕	〃	SH27aの建て替え
32	P3-5 Q3-5	5.7	5.7	0.05	N29° W	○	○	×	×	○	飛鳥	H:碗、高杯、甕、長胴甕、甌 不明土製品	SH27・33・34を切る。	
33	P3-4 Q3-5	4.6	5.1	0.12	N40° E	○	○	×	○	○	飛鳥	H:碗、甕、長胴甕、甌、把手 焼成粘土塊	SH34を切る。SH32に切られる。	
49a	U5-6 V4-6	—	4.2	0.18	N15° W	○	×	×	×	×	飛鳥			
49b	〃	〃	〃	〃	〃	○	×	×	×	×	飛鳥	H:碗、甕、長胴甕、甌、把手 S:小片		SH49aの建て替え
53	S6-7 T6-7 U6-7	3.6	4.1	0.21	N32° W	○	×	×	○	○	飛鳥	H:碗、高杯、甕、長胴甕、土錘 S:蓋 焼成粘土塊	SK58・83に切られる。	
70	S8-9 T8-9	4.6	4.6	0.19	N41° E	○	○	×	○	○	飛鳥	H:碗、高杯、甕、長胴甕、壺 把手、土錘 S:杯蓋 砥石、焼成粘土塊	SB177、SD67を切る。	
76	R12-13 S12-13	4.0	—	0.10	N43° E	○	○	×	×	×	飛鳥	H:碗、甕	SH74・96を切る。SD13に切られる。	
79	P11-13 Q11-12	3.7	3.7	0.15	N 3° W	○	○	×	○	○	古墳後期	H:碗、高杯、甕、S:杯身	SB120、SD78に切られる。	
87	T8-9 U8-9	3.2	3.8	0.11	N22° W	×	×	×	○	×	飛鳥	H:碗、高杯、甕、長胴甕、 鍋、甌 S:甕、壺 焼成粘土塊	SX91を切る。	
107	Q13-15 S14 R13-15	6.7	6.5	0.17	N38° W	○	○	×	×	○	飛鳥	H:碗、高杯、甕 不明土製品	SD148を切る。SB146に切られる。	
108	M17-19 N17-19	6.0	6.2	0.08	N42° W	○	×	×	×	○	飛鳥	H:碗、高杯、長胴甕、把手 焼成粘土塊	SH110を切る。SF109、SD78に切られる。	
110a	K18-19 M18-19 L18-19	—	—	—	N 6° W	○	○	×	×	○	飛鳥		SH108、SF109、SK78に切られる。	
110b	〃	〃	〃	〃	〃	○	○	×	×	×	飛鳥	H:碗、甕、長胴甕、鍋、把手 S:小片	〃	SH110aの建て替え
121	Q16-17 R16	—	3.4	0.06	N31° E	×	×	×	×	○	飛鳥	H:甕	SH106を切る。	
132	P22-23 Q22-23 R23	4.7	5.4	0.12	N23° E	○	○	○	○	○	古墳後期	H:碗、甕、S:杯蓋	SH133を切る。 SK137に切られる。	
147	S12 T12	4.5	—	0.09	N44° E	○	○	×	○	×	飛鳥	H:甕、長胴甕	SD77を切る。SB244、SD13・60に切られる。	
192	U16-17 V16-17	—	—	—	N40° W	○	○	×	?	×	飛鳥?		SH168を切る。SK172に切られる。	
193	R19-21 S19-21	4.3	4.8	0.14	N29° W	○	○	○	○	○	飛鳥	H:碗、高杯、甕、甌 S:杯身、蓋	SH194を切る。SB200に切られる。	
194	Q20-21 R20-21	4.3	4.0	0.09	N39° W	○	○	×	○	○	飛鳥	H:高杯、甕	SH195を切る。SH193、SB200に切られる。	

第6表 竪穴住居一覧表(4)

竪穴住居番号	地区	規模(m)			主軸方向	柱穴	周溝	排水溝	貯蔵穴	竈	時代	出土遺物	切り合い	備考
		東西	南北	深さ										
196	U22 V21-22 W21-22	5.7	5.9	0.15	N25° W	○	○	×	×	○	飛鳥	H:碗、甕、長胴甕、鍋、甌 S:杯	SH198、SD203を切る。SD199に切られる。	第3次調査SH404
211	R21-22 S21-22	-	4.4	0.04	N37° E	○	○	×	○	○	飛鳥	H:碗、小型碗、甕	SD212を切る。SK215・216に切られる。	
219	S20-21 T20-22	5.4	5.9	0.08	N34° W	○	○	×	×	×	?		SH207を切る。SB200、SK209・213に切られる。	

H:土師器 S:須恵器

第7表 掘立柱建物一覧表(1)

建物番号	地区	規模			棟方向	時期	出土遺物	切り合い	備考
		間	桁行m	梁行m					
61	G7-8 H7-8	2×2	3.30	3.30	N26° E	飛鳥～奈良	H:碗		
62	H9-10 I9-10 J9-10	5×2	8.25	4.35	E33° S	飛鳥～奈良	H:小片		
63	K7-8 L7-8	4×2	E4.80 W4.45	S2.80 N3.00	N39° E	弥生後期～ 古墳初め			
98	L12-14 M12-14	4×3	7.20	5.40	E37° N	飛鳥～奈良			
99	N5 O4-6 P5	2×2	3.30	S3.90 N4.05	N26° W	飛鳥～奈良	H:小片	SB225、SK36を切る。	
100	U11-13 V11-13 W12	3(4)×2	6.30	4.20	N31° W	飛鳥～奈良	H:碗、高杯、甕 S:杯身、壺?	SH92、SK80を切る。SK97に切られる。	
101	R10 S10	2×2	2.20	2.20	N35° E	弥生後期～ 古墳初め			
103	L15-16 M15-16	4×2	3.90	3.35	N34° E	弥生後期～ 古墳初め	土器小片		
113	U13 V12-14 W13	4(3)×2	4.80	3.15	N25° W	飛鳥～奈良			
114	M19-20	2×2	2.85	2.70	E22° N	飛鳥～奈良	H:高杯、甕	SF112、SD78を切る。	
120	O11-14 P11-14	6×2	11.60	3.60	N37° E	飛鳥～奈良	H:小片 S:小片	SD78に切られる。 SH79・104を切る。	
135	J22 K22-23	2×2	2.80	2.20	N16° W	弥生後期～ 古墳初め			
136	N21 O20-22 P20-21	4×3	5.10	3.90	E30° N	飛鳥～奈良	H:碗、高杯?、甕 甌	SH131、SK128を切る。	
146	R13-15 S14	3×2	S4.35 N4.50	E3.00 W2.75	E29° N	飛鳥～奈良	H:甕	SH107を切る。	
177	R7-8 S7-8	3×2	3.60	3.45	N31° E	飛鳥?	土器小片	SH70に切られる。	
178	M22 N22-23	3×1	3.60	2.70	E18° N	弥生後期～ 古墳初め		SD124に切られる。	
200	R19-21 S19-21 T20-21	4×3	6.90	4.80	N29° W	飛鳥～奈良	H:碗、甕、把手 S:杯蓋	SH193・194・207・211・219を切る。	
218	W12-14	5×3	7.80	4.50	E48° N	飛鳥～奈良			第1次調査SB90
222	L4-5 M4-5	4×2	4.60	2.50	E39° N	弥生後期～ 古墳初め?	Y:台付甕		
223	M2-3 N2-3	3×2	4.05	3.30	E30° N	飛鳥～奈良?			
224	N3-4 O3-4	4(6)×2	5.40	3.30	N27° E	飛鳥～奈良	H:甕、小片	SH14を切る。	

第8表 掘立柱建物一覧表(2)

建物 番号	地 区	規 模			棟方向	時 期	出 土 遺 物	切 り 合 い	備 考
		間	桁行m	梁行m					
225	N4-5 O4-5	5(6)×5	5.70	E4.25 W4.05	E29° S	飛鳥～奈良	H:小片	SK36を切る。SB99に切られる。	
226	N5-7 O5-7	4×2	6.15	3.60	N18° E	飛鳥～奈良	H:甕 Y:壺		
227	O3-4 P3-4	4×2	4.65	3.15	N44° E	飛鳥～奈良	H:高杯?、小片 Y:高杯、台付甕、 壺	SK21を切る。	
228	P5-6 Q6	2×2	4.20	3.35	N34° W	飛鳥～奈良	H:甕		
229	P5	1×2	E2.70 W2.45	2.10	N35° E	飛鳥～奈良	H:甕	SK20を切る。	
230	O7-8 P7-8	2×2	3.15	3.45	E15° S	飛鳥～奈良?	土器小片		
231	Q7-8 R7-8	2×2	2.70	2.85	E39° N	飛鳥～奈良?	土器小片		
232	R2-4 S3-4	4×2	5.10	3.45	N37° E	飛鳥～奈良?	土器小片		
233	R5-6 S5-6 T5-6	4×3	5.40	4.95	E27° N	飛鳥～奈良?	土器小片		
234	T4-5 U4-5	3×2	—	E3.45 W3.30	E40° N	飛鳥～奈良	H:甕	SH56を切る。	
235	V7-8 W7-8	4×2	4.05	3.60	N37° E	飛鳥～奈良	土器小片		
236	K10-11 L10-11	3×1	2.90	2.20	N31° W	弥生後期～ 古墳初め?			
237	M9	2×2	E2.40 W2.55	S2.40 N2.45	N20° E	弥生後期～ 古墳初め?	Y:甕		
238	Q18-19 R18-19	2×2	3.60	3.00	E36° S	飛鳥～奈良?	Y:甌、小片		
239	Q18 R17-18	2×2	3.60	E3.00 W2.70	E22° N	飛鳥～奈良	H:碗、高杯、甕		
240	R17 S16-18 T17	4×2	3.90	2.70	E16° N	飛鳥～奈良?			
241	S18 T18	2×2	3.00	3.30	N29° E	飛鳥～奈良?			
242	S19-20 T19-20	2×2	3.00	2.70	N43° W	飛鳥～奈良	H:甕	SF185を切る。SH193に切られる。	
243	T22-23 U22-23	2×2	3.60	3.15	E16° S	飛鳥～奈良	H:甕	SD140を切る。SD199に切られる。	
244	S11-12 T11-12	3×2	3.60	2.80	N1° E	飛鳥～奈良	H:甕	SH147を切る。SD60に切られる。	
245	T12-13	1×2	2.70	2.10	N30° W	時期不明	土器小片	SD60に切られる。	
246	M9 N8-9	2×1	2.20	2.00	N14° E	弥生後期～ 古墳初め?			
247	N2 O2	3×2	4.50	3.45	N31° E	飛鳥～奈良?		SH23を切る。	
248	V16-17 W15-17	4×2	5.40	3.90	N46° E	飛鳥～奈良	H:甕	SD167を切る。SD13・60に切られる。	
249	R18-19	2×2	3.15	3.30	E35° S	飛鳥～奈良?	土器小片		
250	T19 U18-19	3×2	3.50	2.60	E30° N	奈良	H:有孔広口筒形土 器		
251	Q5-6	3×2	2.80	2.80	N38° E	飛鳥～奈良	H:甕		

H:土師器 S:須恵器 Y:弥生土器

棟方向不明の建物は、仮り東西棟として方位を示した。

Ⅲ. 遺物

今回の調査で出土した遺物の総数は整理箱で270箱(洗浄後)である。ほとんどが弥生時代後期から古墳時代初めと飛鳥時代から奈良時代の土器^⑧であるが、旧石器時代のチャート剥片、中世の土師器鍋・陶器椀(山茶椀)や近世以降の陶器・磁器・瓦なども若干含まれる。

遺物のほとんどは遺構から出土しているが、耕作土(灰色土)から出土したものもある。

遺物の残存状態は、遺構が耕作などによってかなり削平を受けていること、基盤層や遺構埋土が粘質土であることなどから良くなく、調整の技法や文様が不明瞭なものが多い。

(1) 弥生時代後期の遺物(第15・16図)

①SX5出土遺物(1~8)

いずれも周溝埋土から出土した遺物である。(1・3~5)は第2層の黒褐色土から、(2・8)は第3層の黄灰色粘質土から出土した。

高杯(1・2) 1は小形で杯部は浅く、外反する。2は口縁端部を欠くが、杯部は半球状である。脚部は比較的太く、裾部が開く。

台付甕(3) 台部の低いもので、体部外面はヘラケズリを施す。内面にはハケメが残る。

壺(8) 上半部と下半部が接合出来なかったが、確実に同一個体である。外面には櫛描の大きな波状文が施される。口頸部は直線的に外上方に立ち上がる。体部の最大径は中ほどにある。

ミニチュア台付甕・壺(4・5) 共に基本的には手捏ねの土器であるが、体部下半にヘラケズリを施している。底部内面にも棒状工具によるヘラミガキ状の痕跡が残る。

②SH6出土遺物(9~15・24・25)

13・15は周溝の埋土から、12・24は埋土第2層の明褐色土、9・11・14・25は第3層の黒褐色土から出土した。

高杯(9~11) いずれも脚部のみが出土した。9の脚部は比較的太く中空で、裾部が開く。透孔は4か所ある。10の脚部は比較的太く中空であるが、裾部

はやや直線的である。透孔は6か所ある。11の脚部はやや細く、柱状部にわずかに中実部分がある。裾部が開く。透孔は6か所ある。

壺(14) 口頸部は直線的に外上方に立ち上がる。器壁の磨滅が激しく調整などは不明である。

小型壺(12) 口頸部はやや外反して立ち上がる。内外面共にハケメを施す。

鉢(13) 低い脚台と直線的に立ち上がる体部をもつ。台付甕である可能性もある。

蓋(15) つまみ部が外上方に開き、体部が外反しながら開く。内面には輪状に煤が付着する。

銅鐸形土製品(24・25) 24は裾部が欠損している。鈕を含めた立面形が台形状である。25にくらべると小形であり、鐸身と鈕の区別は明瞭でないが、鈕の部分をつまんで偏平にしている。鈕から斜めに型持孔をあけている。無文で、舌などによる内面の擦痕はみられない。

25は鈕と鐸身の1/4が欠損している。鐸身は台形状で水平断面が楕円形である。舞から斜めに型持孔をあけている。鐸身には線刻で袈裟襷文が施される。鱗は鐸身の側面を若干つまみ出すようにして表現している。舌などによる内面の擦痕はみられない。

③SH56出土遺物(16~19)

19は支柱穴の埋土から、それ以外は堅穴住居の埋土から出土した。

高杯(16) 脚部はやや細く、柱状部にわずかに中実部分がある。裾部が開く。透孔は4か所ある。

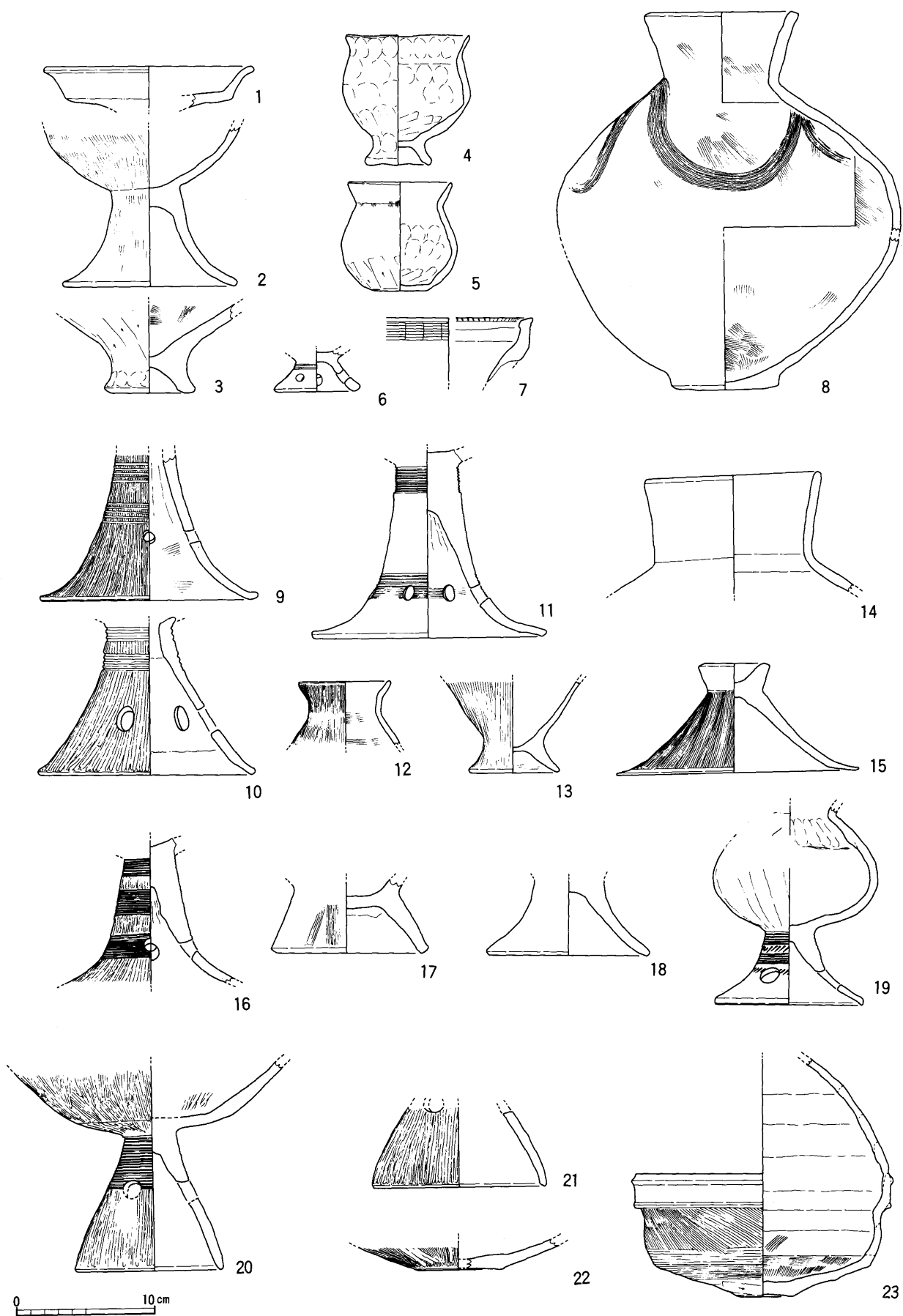
台部(17・18) 17は直線的に、18は外反して開く。いずれも磨滅が激しく調整や加飾の有無は不明である。17は台付甕、18は台付甕と台付壺の両方の可能性がある。

台付壺(19) 体部の最大径は下方1/3ほどにある。台部は外反し、横線文と刺突文が2帯施される。

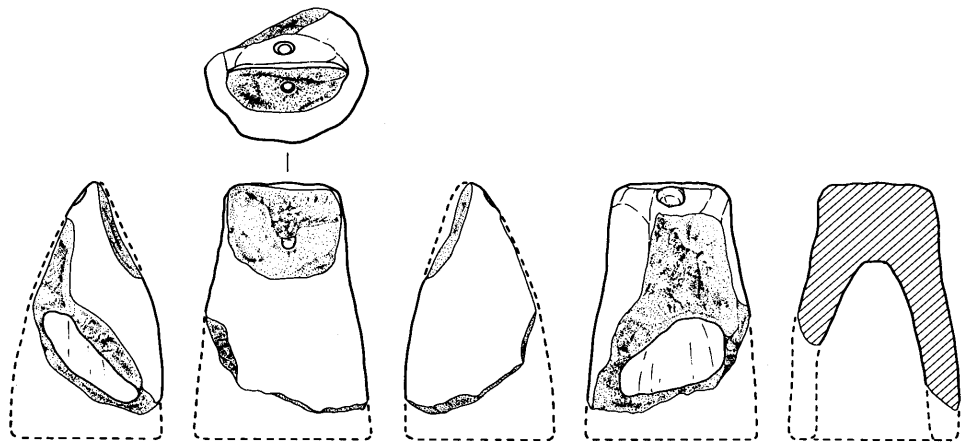
(2) 古墳時代初めの遺物(第15図)

SH19出土遺物

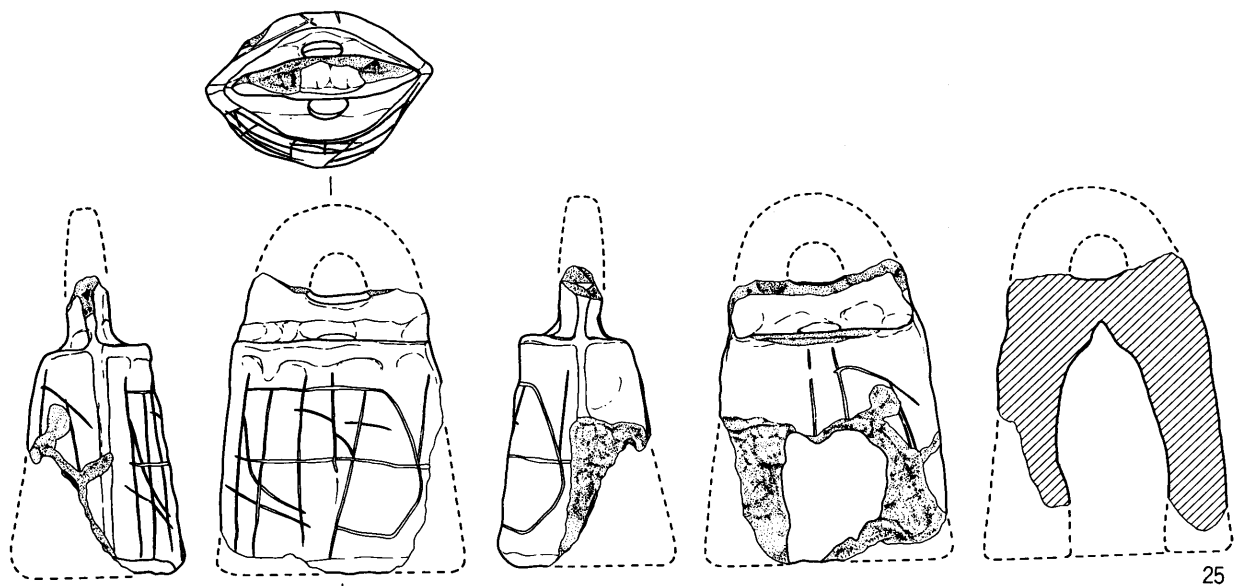
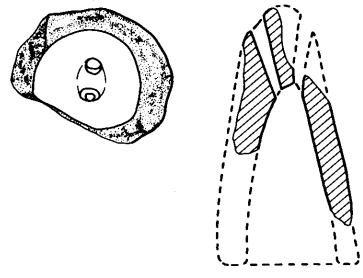
23は周溝の埋土から、20~22は堅穴住居の埋土から出土した。



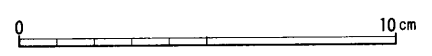
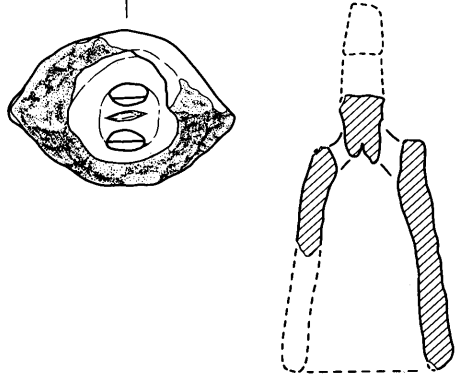
第15図 出土遺物実測図(1) (1:4)



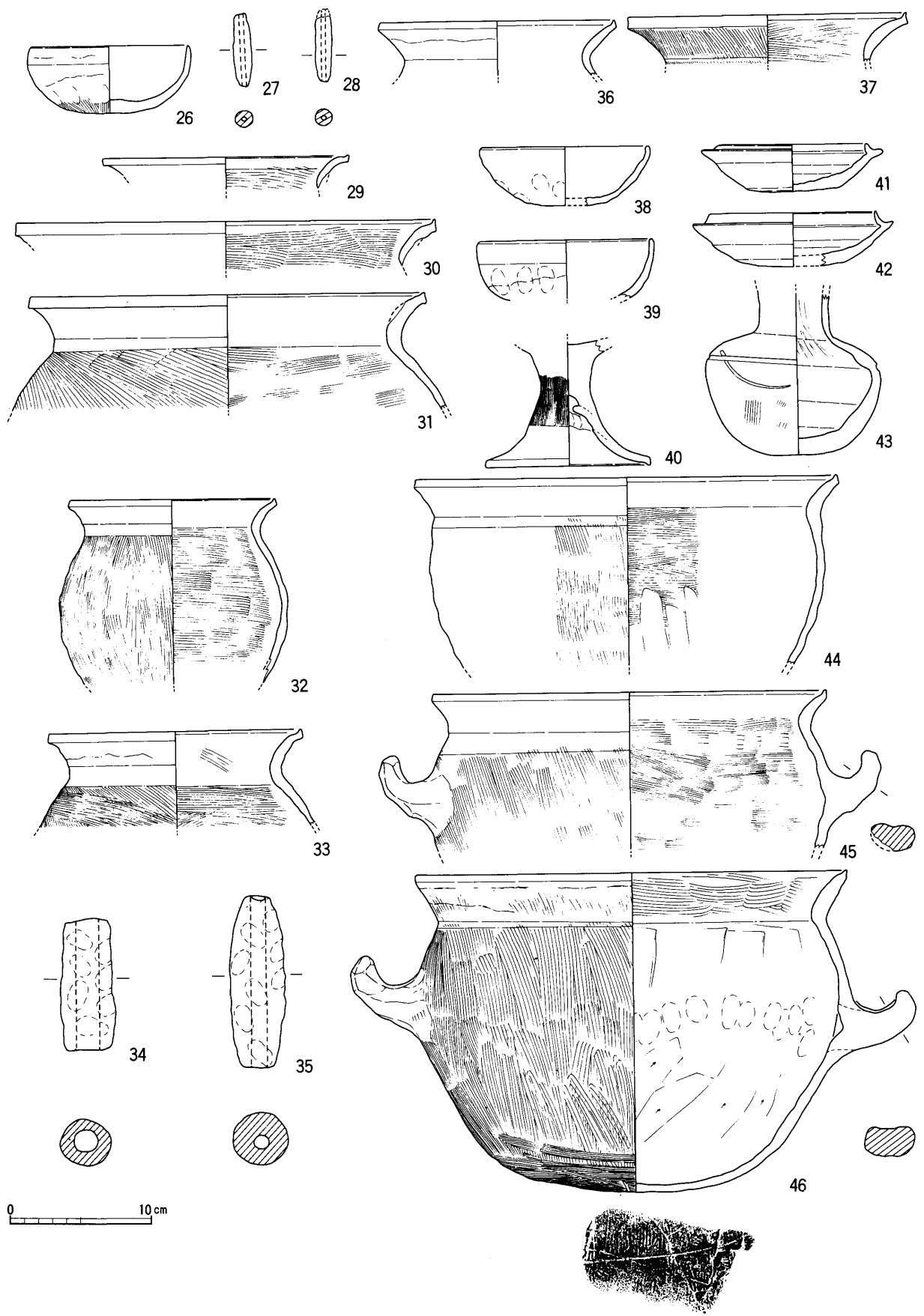
24



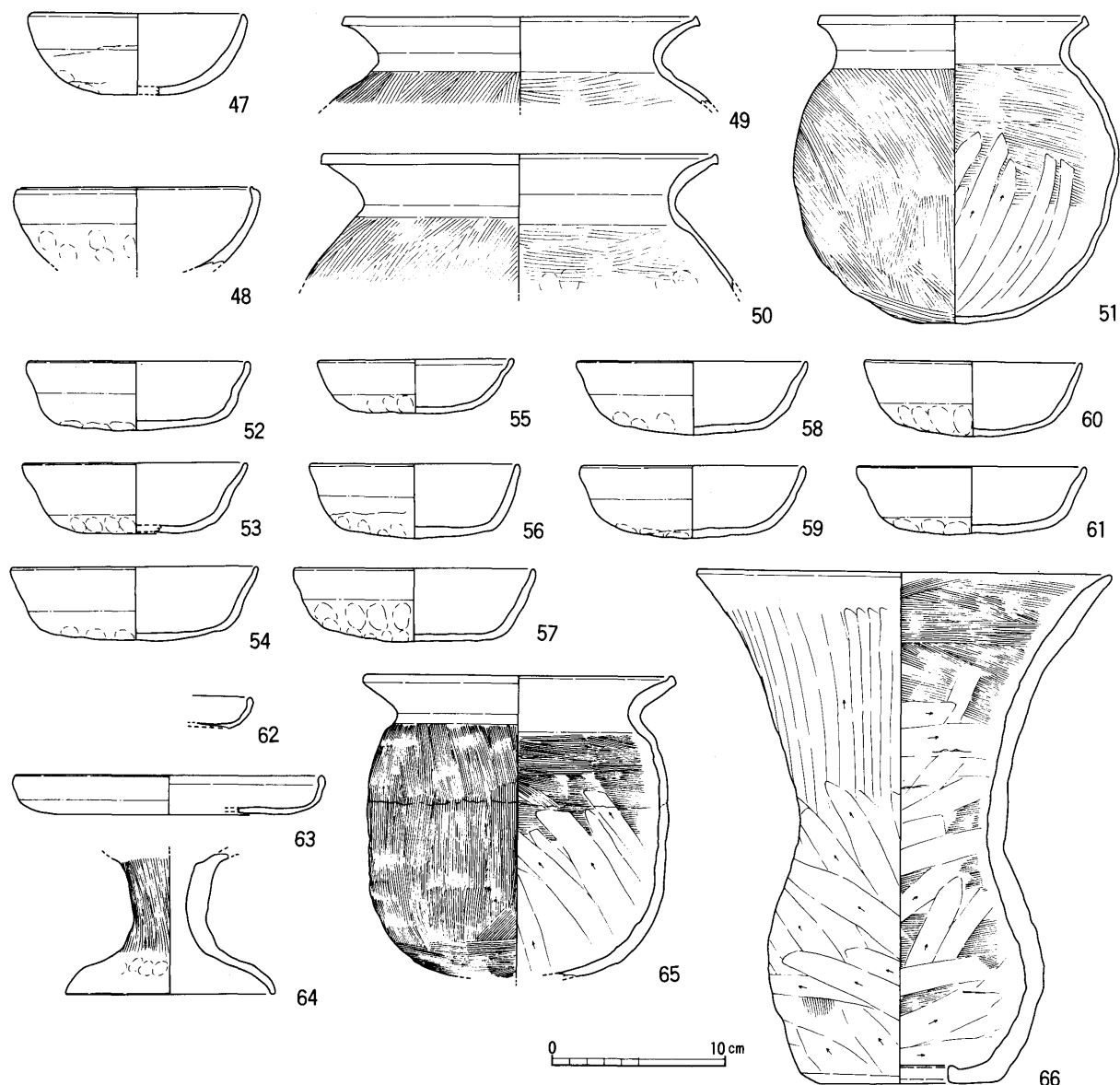
25



第16图 出土遺物実測図(2) (1 : 2)



第17图 出土遺物実測図(3) (1 : 4)



第18図 出土遺物実測図(4)(1:4)

高杯(20・21) 20の杯部は深く、下位に稜を持つ。透孔は3か所ある。21は脚部のみであるが、ほぼ同じものであろう。

壺(22) 平底の壺である。

手焙形土器(23) 鉢部口縁の受口はゆるく、2本の低い凸帯を貼りつけている。蔽部には縦方向のハケメがある。

(3) 飛鳥時代から奈良時代の遺物(第17・18図)

ここに図示した例は、いずれも土師器焼成坑の埋土から出土した遺物であり、土師器焼成坑の床面から焼成時の状態で出土したものはない。遺物が床面

から浮いた状態で出土すること、須恵器などが含まれていることから、使用しなくなった土師器焼成坑を廃棄土坑として利用したと思われる。

この時代の土器は、土師器焼成坑の他に竪穴住居や土坑、溝から多量に出土している。

土師器碗は、深く、体部が丸く口縁端部が内弯するものが多い。土師器甕や鍋は、口縁端部を強くヨコナデし、口頸部が外上方に屈曲し、肥厚するものが多い。これらの特徴から、大部分は飛鳥時代の土器であると思われる。ただし、SF189出土遺物は、碗が平底になっていること、皿がみられることなどから、奈良時代の遺物であると思われる。

① SF28出土遺物(26~31)

にハケメが残る。

土師器甕(29・30)・鍋(31) 29や30は共に口頸部内面にハケメが残る。また、粘土接合部分でウロコ状に割れている。30は大形で、鍋の可能性もある。

31にはわずかに接合部分があり把手が付く。

土錘(27・28) 共に土師質の小形の土錘である。

外面を比較的丁寧にナデている。

②SF109出土遺物(36)

土師器甕で、器壁の磨滅が激しく調整は不明瞭である。口頸部はあまり肥厚しない。

③SF112出土遺物(37)

土師器甕で、口頸部の内・外面にハケメが残る。

④SF170出土遺物(32～34)

土師器甕(32・33) 32は器壁の磨滅が激しい。内面には比較的下の方まで横方向のハケメがある。体部の形状は球形に近い。

33は口径がやや大きい。

土錘(34) 土師質の大形の土錘である。外面にはユビオサエの痕跡が残る。

⑤SF185出土遺物(35・38～46)

土師器椀(38・39) 38は器壁の磨滅が激しく調整は不明瞭である。やや浅くあまり体部は丸味を帯びない。39の口縁端部はあまり内弯しない。

土師器高杯(40) 脚部は素地を螺旋状に積み上げている。脚部の裾部は土師器甕の口縁端部と同じように強くヨコナデし、面を持たせている。

土師器鍋(44～46) 44は把手が付くかどうか不明である。体部の張りが弱い。45・46の把手は内側から挿入して接合している。46は口頸部の内面にハケメが残る。底部外面には「×」状の記号がある。

須恵器杯身(41・42) 共に立ち上がり部分が低く内傾し、底部外面にヘラ切りの痕跡が残る。

須恵器甕(43) 甕と思われるが、壺の可能性もある。体部に沈線が一本つけられる。体部には、かすかにハケ状工具の痕跡がみられる。

土錘(35) 土師質の大形の土錘である。両端を尖らせている。外面にはユビオサエの痕跡が残る。

⑥SF186出土遺物(47～51)

土師器椀(47・48) 47の口縁端部はあまり内弯しない。48は口縁端部を強くヨコナデしており、端部が内弯し、端部外面に沈線状の窪みがみられる。

土師器甕(49～51) いずれも口頸部はあまり肥厚しない。51は器壁の磨滅が激しく調整は不明瞭である。体部の形状は球形に近い。

⑦SF189出土遺物(52～66)

土師器椀(52～61) いずれも浅く平底で、口縁部が直線的に開く。口縁端部が内弯するものと、直線的に丸くおわるものがある。

土師器皿(62・63) 共に器壁の磨滅が激しく調整は不明瞭である。口縁端部は丸くおわる。橙色をしており、いわゆる「精製土器」である。

土師器高杯(64) SF185出土の40と比較すると脚部の裾部のナデが弱い。

土師器甕(65) 口縁端部のナデがやや弱い。口頸部はやや肥厚するが、屈曲が強い。体部は直線的であり、口径が体部最大径より大きい。

土師器有孔広口筒形土器(66) 特殊な器種である。口縁部が大きく開き、体部が丸く、底には焼成前の穿孔がある。器壁は厚い。器壁の磨滅が激しい。

第9表 出土建物観察表(1)

番号	登録番号	器種	遺構 出土位置	計測値(cm)			調整技法の特徴	胎土	色調	残存	備考
				口径	底径	器高					
1	008 05	弥生土器 高杯	SX5 第2層	14.7	—	—	調整不明	微砂粒少	にぶい黄橙	口縁部1/4	磨耗激しい
2	003 04	弥生土器 高杯	SX5 第3層	—	12.6	—	外面: ハケメ、ヨコナデ 内面: ナデ、ヨコナデ	砂粒多	浅黄橙 褐	ほぼ完形	磨耗激しい
3	008 02	弥生土器 台付甕	SX5 第2層	—	6.5	—	外面: ケズリ、オサエ 内面: ナデ、ハケメ残る	砂粒少	にぶい黄橙	台部完存	

第10表 出土遺物観察表(2)

番号	登録番号	器種	遺構 出土位置	計測値 (cm)			調整技法の特徴	胎土	色調	残存	備考
				口径	底径	器高					
4	003 03	弥生土器 ミニチュア台付 甕	SX5 第2層	9.0	4.6	9.5	外面: オサエ、ナデ、ケズリ? 内面: オサエ、ナデ、工具痕残る	微砂粒少	灰白 黄橙	口縁部2/3	磨耗激しい
5	003 02	弥生土器 ミニチュア壺	SX5 第2層	7.6	4.5	7.9	外面: ヨコナデ?、ナデ、ケズリ? 内面: ヨコナデ?、オサエ、工具痕残る	細砂粒少	にぶい黄橙	完形	磨耗激しい
6	009 04	弥生土器 台部	SX5	-	5.8	-	外面: 横線文、透孔5方向 調整不明	精良	黄橙	台部完存	磨耗激しい
7	009 02	弥生土器 口縁部	SX5	-	-	-	外面: 簾状文 内面: 刺突文	砂粒多	にぶい黄橙	口縁部小片	
8	003 01 008 01	弥生土器 壺	SX5 第3層	11.2	7.6	-	外面: ヨコナデ、ハケメ、ナデ、櫛描波状文 内面: ヨコナデ、ハケメ	微砂粒少	にぶい黄橙	ほぼ完形	
9	002 01	弥生土器 高杯	SH6 第3層	-	15.7	-	外面: ミガキ、櫛描横線文、透孔4方向、ヨコナデ 内面: ナデ、ハケメ残る、ヨコナデ	砂粒多	浅黄橙	脚底部3/4	内面に煤が輪状に付着
10	011 03	弥生土器 高杯	SH6	-	15.2	-	外面: ミガキ、櫛描横線文、透孔6方向、ヨコナデ 内面: ナデ、ヨコナデ	砂粒少	明黄褐	脚底部1/2	
11	012 02	弥生土器 高杯	SH6 第3層	-	16.2	-	外面: ミガキ?、櫛描横線文、透孔6方向、ヨコナデ 内面: ナデ、ハケメ残る、ヨコナデ	細砂粒少	明黄褐	脚底部1/2	
12	002 02	弥生土器 小型壺	SH6 第2層	6.6	-	-	外面: ヨコナデ、ハケメ 内面: ヨコナデ、ナデ、ハケメ	微砂粒少	にぶい黄橙	口縁部1/2	
13	012 01	弥生土器 鉢	SH6 周溝	-	6.2	-	外面: ハケメ、ヨコナデ 内面: ナデ、ハケメ残る、ヨコナデ	細砂粒少	橙	底部ほぼ完 存	
14	011 01	弥生土器 壺	SH6 第3層	12.4	-	-	調整不明	砂粒少	橙	口縁部1/2	磨耗激しい
15	001 01	弥生土器 蓋	SH6 周溝	17.4	つまみ 5.1	8.0	外面: ナデ、ハケメ、ヨコナデ 内面: ナデ、ヨコナデ	細砂粒多	浅黄橙	口縁部3/4	内面に煤が輪状に付着
16	009 03	弥生土器 高杯	SH56	-	-	-	外面: 櫛描横線文、ミガキ、透孔4方向 内面: ナデ	細砂粒多	にぶい橙	柱状部ほぼ 完形	
17	008 03	弥生土器 台付甕	SH56	-	台底 10.5	-	外面: ナデ、ハケメ残る、ヨコナデ 内面: ナデ、ヨコナデ	砂粒少	橙、にぶい 橙	台部ほぼ完 形	黒斑あり
18	008 04	弥生土器 台部	SH56	-	台底 11.8	-	調整不明	砂粒多	橙		磨耗激しい
19	009 01	弥生土器 台付壺	SH56	-	台底 10.7	-	外面: ケズリ、櫛描横線文、刺突文、透孔3方向 内面: オサエ、ナデ	砂粒多	橙	体部完存 台部2/3	磨耗激しく調整不明 瞭
20	035 02	土師器 高杯	SH19	-	10.5	-	外面: ミガキ、櫛描横線文、透孔3方向、ヨコナデ 内面: ヨコナデ、ナデ	微砂粒少	にぶい橙	脚部ほぼ完 存	
21	034 05	土師器 高杯	SH19	-	12.6	-	外面: ミガキ、透孔3方向、ヨコナデ 内面: ヨコナデ、ナデ	細砂粒少	橙	脚底部1/2	磨耗激しく調整不明 瞭
22	035 01	土師器 壺	SH19	-	6.1	-	外面: ハケメ後ミガキ、ナデ 内面: 調整不明	微砂粒少	にぶい橙	底部1/3	
23	001 02	土師器 手焙形土器	SH19	鉢部 18.4	4.2	-	外面: ハケメ、ナデ、ケズリ 内面: ナデ、ハケメ	細砂粒少	にぶい褐	底部完存	
24	007 01	銅鐸形土製 品	SH6 第2層	-	-	-	型持孔2か所	微砂粒少	浅黄橙		
25	006 01	銅鐸形土製 品	SH6 第3層	-	-	-	型持孔2か所、線刻菱装襷文	細砂粒多	灰黄褐		
26	004 02	土師器 碗	SF28	11.1	4.8	-	外面: ヨコナデ、ナデ、ハケメ 内面: ヨコナデ、ナデ	細砂粒少	浅黄橙	完形	黒斑1/3
27	020 03	土師質 土錘	SF28	長さ 5.2	太さ 1.3	重さ 6g	外面: ナデ	微砂粒少	淡黄	完形	
28	020 04	土師質 土錘	SF28	-	太さ 1.2	-	外面: ナデ	微砂粒少	淡黄	2/3	
29	019 03	土師器 甕	SF28	17.0	-	-	外面: ヨコナデ 内面: ヨコナデ、ヨコナデ後ハケメ	細砂粒少	にぶい黄橙	口縁部1/3	ウロコ状に剥離
30	019 01	土師器 甕	SF28	29.5	-	-	外面: ヨコナデ 内面: ヨコナデ、ハケメ	微砂粒多	にぶい黄橙	口縁部1/3	ウロコ状に剥離
31	019 02	土師器 鍋	SF28	27.7	-	-	外面: ヨコナデ、ハケメ 内面: ヨコナデ、ハケメ	細砂粒少	にぶい黄橙	口縁部1/8	ウロコ状に剥離
32	021 02	土師器 甕	SF170	14.3	-	-	外面: ヨコナデ、ハケメ 内面: ヨコナデ、ハケメ	細砂粒多	淡黄	口縁部1/4	磨耗激しく調整不明 瞭
33	022 02	土師器 甕	SF170	17.7	-	-	外面: ヨコナデ、ハケメ 内面: ヨコナデ、ハケメ	細砂粒少	灰白	口縁部1/6	
34	022 03	土師質 土錘	SF170	長さ 9.5	太さ 3.6	重さ 129g	外面: オサエ	細砂粒多	淡黄	完形	

第11表 出土遺物観察表 (3)

番号	登録番号	器種	遺構 出土位置	計測値 (cm)			調整技法の特徴	胎土	色調	残存	備考
				口径	底径	器高					
35	027 03	土師質 土鉢	SF185	長さ 12.3	太さ 3.8	重さ 171g	外面：オサエ	細砂粒多	にぶい黄橙	完形	黒斑1/2
36	019 04	土師器 甕	SF109	16.6	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	細砂粒少	明黄橙	口縁部1/6	磨耗激しく調整不明瞭
37	020 01	土師器 甕	SF112	19.6	—	—	外面：ヨコナデ、ハケメ 内面：ヨコナデ、ハケメ	微砂粒少	淡黄、にぶい黄橙	口縁部1/4	
38	022 01	土師器 碗	SF185	11.8	—	4.1	外面：ヨコナデ、オサエ？ 内面：ヨコナデ、ナデ	細砂粒多	浅黄橙	口縁部1/4	磨耗激しく調整不明瞭
39	025 04	土師器 碗	SF185	12.0	—	—	外面：ヨコナデ、オサエ 内面：ヨコナデ、ナデ	細砂粒多	橙	口縁部ほぼ 完存	
40	025 03	土師器 高杯	SF185	—	11.7	—	外面：ヨコナデ、ハケメ、ヨコナデ 内面：オサエ、ヨコナデ	微砂粒多	にぶい黄橙	脚底部1/8	
41	025 01	須恵器 杯身	SF185	12.9	3.4	—	外面：ロクロナデ、ヘラ切り痕跡残る 内面：ロクロナデ	細砂粒多	灰白、白	口縁部3/4	
42	025 02	須恵器 杯身	SF185	11.9	—	3.8	外面：ロクロナデ、ヘラケズリ 内面：ロクロナデ	微砂粒多	オリーブ灰	口縁部1/4	
43	027 01	須恵器 皿	SF185	体部 12.4	—	—	外面：ロクロナデ、沈線、一部ハケ状工具痕	細砂粒少	褐灰	体部1/2	焼けひずみ大
44	024 02	土師器 鍋	SF185	29.6	—	—	外面：ヨコナデ、ハケメ 内面：ヨコナデ、ハケメ	細砂粒多	浅黄橙	口縁部1/12	内外面でハケメの元 体異なる。 把手つくかどうか不明
45	024 01	土師器 鍋	SF185	27.7	—	—	外面：ヨコナデ、ハケメ 内面：ヨコナデ、ハケメ	細砂粒多	浅黄橙	口縁部1/5	
46	031 01	土師器 鍋	SF185	30.4	—	22.8	外面：ヨコナデ、ハケメ 内面：ヨコナデ、ハケメ、ナデ、オサエ、ヘラケズリ	砂粒少	にぶい橙、 淡黄橙	口縁部2/3	黒斑あり。
47	026 02	土師器 碗	SF186	12.0	—	4.7	外面：ヨコナデ、オサエ？ 内面：ヨコナデ、ナデ	砂粒少	明黄褐	口縁部1/4	
48	026 03	土師器 碗	SF186	13.0	—	—	外面：ヨコナデ、オサエ 内面：ナデ	細砂粒多	淡黄	口縁部1/6	
49	027 02	土師器 甕	SF186	20.1	—	—	外面：ヨコナデ、ハケメ 内面：ヨコナデ、ハケメ	砂粒多	浅黄橙	口縁部1/3	
50	026 04	土師器 甕	SF186	22.6	—	—	外面：ヨコナデ、ハケメ 内面：ヨコナデ、オサエ後ハケメ	砂粒多	淡黄	口縁部1/4	
51	028 01	土師器 甕	SF186	15.2	—	17.8	外面：ヨコナデ、ハケメ 内面：ヨコナデ、ハケメ、ヘラケズリ	砂粒多	明黄褐	口縁部3/4	黒斑あり
52	032 01	土師器 碗	SF189	12.8	—	4.0	外面：ヨコナデ、オサエ 内面：ヨコナデ、ナデ	細砂粒少	浅黄橙	完形	
53	033 04	土師器 碗	SF189	13.0	—	4.1	外面：ヨコナデ、オサエ 内面：ヨコナデ、ナデ	細砂粒少	灰黄褐	口縁部1/3	黒斑あり
54	032 05	土師器 碗	SF189	14.0 ~14.8	—	4.3	外面：ヨコナデ、オサエ 内面：ヨコナデ、ナデ	細砂粒少	浅黄橙	ほぼ完形	黒斑あり
55	034 01	土師器 碗	SF189	11.4	—	3.6	外面：ヨコナデ、オサエ 内面：ヨコナデ、ナデ	細砂粒少	にぶい橙	完形	
56	032 06	土師器 碗	SF189	12.1 ~12.7	—	4.3	外面：ヨコナデ、オサエ 内面：ヨコナデ、ナデ	細砂粒少	浅黄橙 灰	ほぼ完形	黒斑あり
57	032 02	土師器 碗	SF189	13.9	—	4.2	外面：ヨコナデ、オサエ 内面：ヨコナデ、ナデ	細砂粒少	浅黄橙 褐灰	口縁部5/8	黒斑あり
58	032 03	土師器 碗	SF189	13.3	—	4.3	外面：ヨコナデ、オサエ 内面：ヨコナデ、ナデ	細砂粒少	浅黄橙	口縁部5/8	黒斑あり
59	032 04	土師器 碗	SF189	13.0	—	4.3	外面：ヨコナデ、オサエ 碗内面：ヨコナデ、ナデ	細砂粒少	浅黄橙	口縁部7/8	黒斑あり
60	033 03	土師器 碗	SF189	12.5	—	4.5	外面：ヨコナデ、オサエ 内面：ヨコナデ、ナデ	細砂粒少	浅黄橙	口縁部1/2	
61	033 01	土師器 碗	SF189	13.2	—	4.1	外面：ヨコナデ、オサエ 内面：ヨコナデ、ナデ	細砂粒少	浅黄橙	完形	
62	034 03	土師器 皿	SF189	—	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ、ナデ	細砂粒少	橙	口縁部小片	磨耗激しく調整不明瞭
63	034 02	土師器 皿	SF189	17.8	—	2.3	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ、ナデ	細砂粒少	橙	口縁部1/7	磨耗激しく調整不明瞭
64	034 04	土師器 高杯	SF189	—	12.0	—	外面：ハケメ、オサエ、ヨコナデ 内面：ヨコナデ、ナデ	細砂粒少	にぶい橙	口縁部1/4	
65	030 01	土師器 甕	SF189	17.6	—	—	外面：ヨコナデ、ハケメ 内面：ヨコナデ、ハケメ、ヘラケズリ	微砂粒少	灰褐、にぶい黄橙	口縁部1/6	
66	029 01	土師器 有孔工陶形土器	SF189	23.6	9.8	29.6	外面：ヨコナデ、ヘラケズリ 内面：ヨコナデ、ハケメ、ヘラケズリ	細砂粒少	灰褐、橙	ほぼ完形	

IV. 小 結

(1) 銅鐸形土製品について

遺跡内の最も西に位置する竪穴住居SH6の埋土から、銅鐸形土製品が2点出土した。三重県内では、鈴鹿市上箕田遺跡・一反通遺跡、津市太田遺跡、松阪市涌早崎遺跡・堀町遺跡例に次ぐ、6・7例目の出土例となる。

銅鐸形土製品は、天本洋一氏の集成^⑩によると、北九州から南関東までの63の遺跡から93点出土している。地域的に見ると佐賀・福岡の北九州、大阪・奈良・京都・和歌山の近畿が各29点と最も多く、本遺跡の属する伊勢湾沿岸ではそれに次ぐ17点（天本氏の集成後出土した堀町遺跡1点・本遺跡2点を加えると20点）が出土しているとされている。

出土状況や銅鐸との比較、用途と年代については、前掲の天本氏の他、野本孝明氏の研究^⑪がある。野本氏はこれまでの銅鐸形土製品の研究史を整理し、新資料に対する検討を加えた上で、①出土遺構は、銅鐸形土製品が廃棄されたと思われる遺物包含層と溝状遺構が圧倒的に多いのであるが、住居に関連する遺構からも出土していることから、これらは本来的に、住居内やその周辺等の日常生活に密着した場所での使用を思わせること。②伴出する弥生土器から、中期前半を上限とし、中期後半から後期にかけて盛行し後期末を下限と考えることができること。③土製品は祭祀遺物との伴出が認められることから、他の祭祀遺物と共に祭祀用として使用されたと思われること。④出土遺跡は、大集落・長期継続型集落・銅鐸鑄造集落・銅鐸保有集落のいずれかの集落である。また、銅鐸形土製品を複数出土する遺跡は、おそらく大集落か長期継続型集落であることなどを指摘されている。これらの研究成果を基に、本遺跡出土の銅鐸形土製品について若干の考察を加えたい。

出土状況 2点の銅鐸形土製品は、竪穴住居の埋土から出土している。いずれも床面からかなり浮いて出土しているので、住居に伴う遺物とは考えられず、廃絶してやや時間が経過した竪穴住居の窪みに、土器などと共に廃棄されたのであろう。

時期 銅鐸形土製品の所属時期は、伴出する土器から25は弥生時代後期前葉、24はそれ以降の時期にあたると考えられる。

用途 出土の状況や伴出遺物から、銅鐸形土製品の用途を窺うことはできない。しかし、銅鐸形土製品が廃棄された場所は、同時期の集落では最も西にあたることから、集落の縁辺部で何らかの祭祀に用いられたあと廃棄された可能性もある。

銅鐸形土製品を持つ集落 本遺跡では、これまで合計29,000m²の発掘調査が行われ、弥生時代後期から古墳時代初めの竪穴住居や方形周溝墓が検出されている。しかし、遺跡内からは銅鐸やその鑄造に関する遺物は出土していない。そのことや複数の銅鐸形土製品が出土したことから、本遺跡は野本氏の分類の「大集落」・「長期継続型集落」に当たる。

本遺跡の付近では、銅鐸の出土例はない。しかし、25は袈裟襷文を持ち、銅鐸を直接模倣した可能性があり、今後付近において銅鐸が出土する可能性も十分考えられよう。

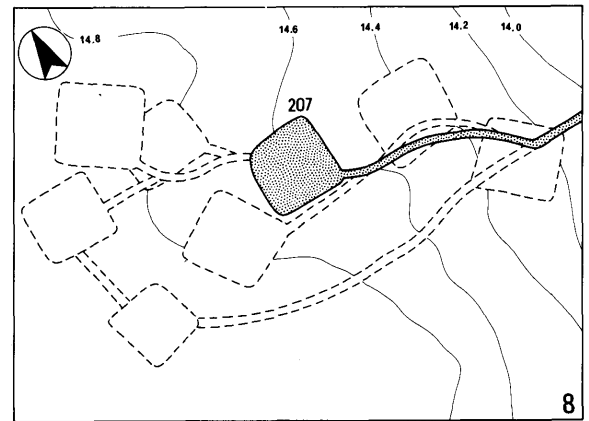
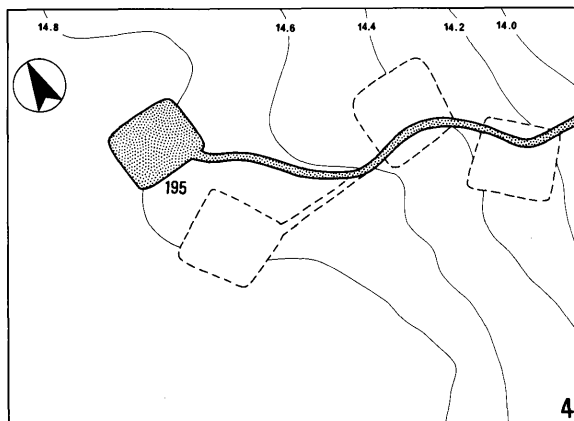
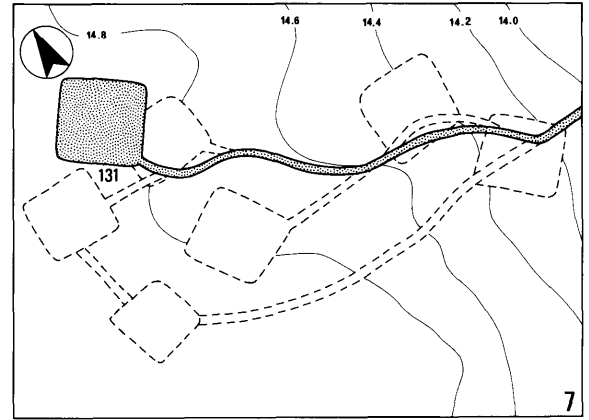
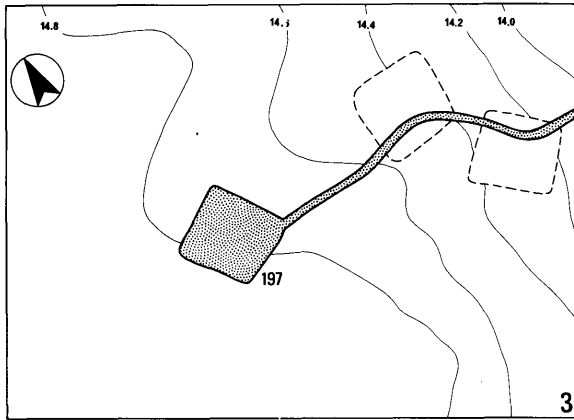
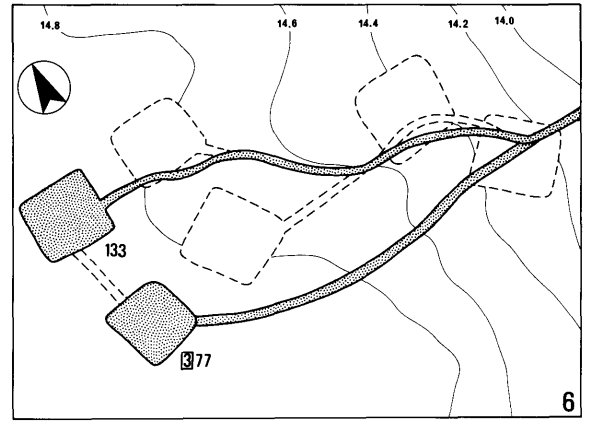
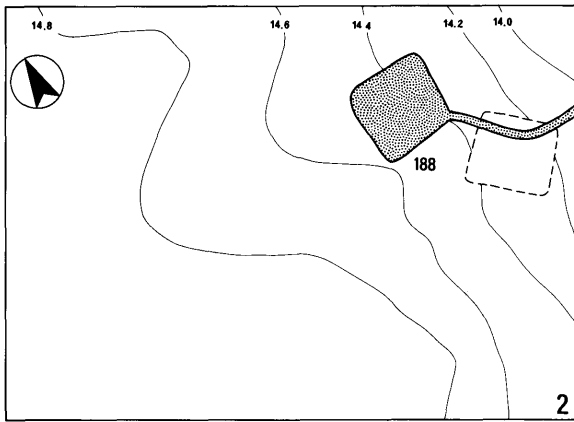
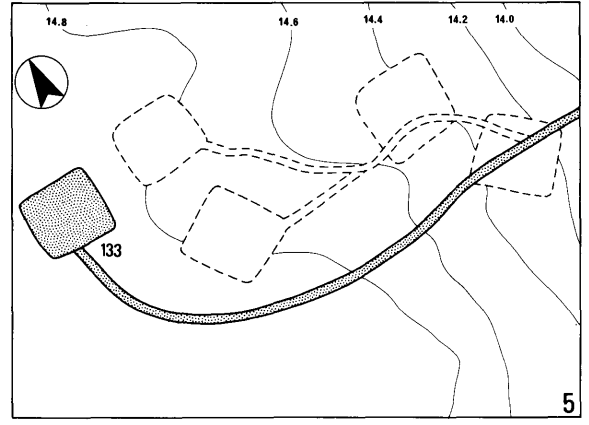
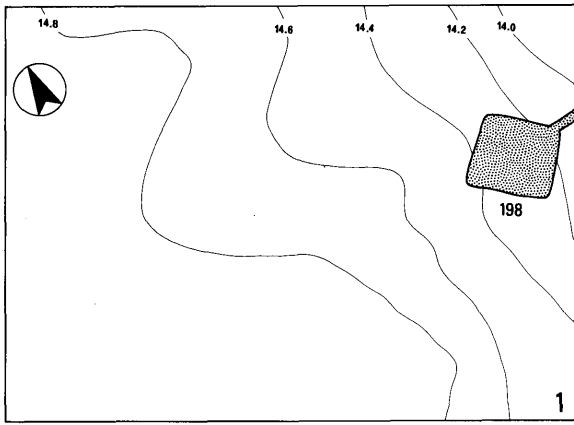
(2) 排水溝を継続的に利用する竪穴住居群について

北野遺跡で検出された弥生時代後期から古墳時代初めの竪穴住居には、排水溝を持つものが多くある。排水溝は竪穴住居の隅から掘られているものがほとんどで、深さは竪穴住居よりも深いものが多い。

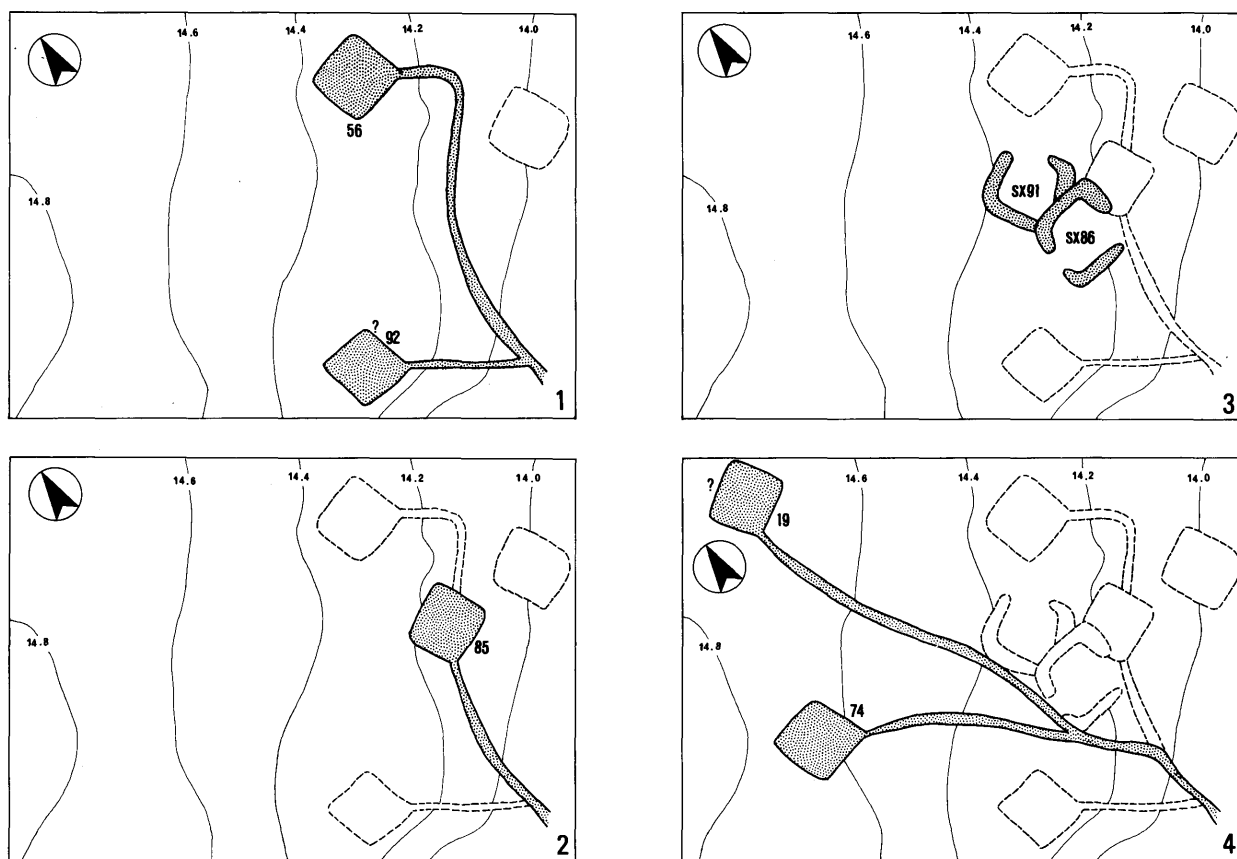
今回の調査でも、このような竪穴住居が多く検出された^⑫。その中でも、調査区東側で検出された竪穴住居の中には、排水溝を継続的に利用する竪穴住居群が2か所にみられた(A群=SH198-188a・b-197-195-133-第3次調査SH77-131a・b-207とB群=SH56-92-85-19-74)。

これらの竪穴住居群の時期は、弥生時代後期の後半から古墳時代初めであり、かなり長い期間、排水溝は機能していたようである。また、竪穴住居の構造にも、南辺中央部分に貯蔵穴を持つものと持たないものがある。

A群 各群の遺構の前後関係を述べることにする。A群は調査区の最も南の東斜面にある。群内で最も



第19图 A群竖穴住居变迁图



第20図 B群竪穴住居変遷図

古い住居は、調査区内で最も低い所に建てられたSH198である。この竪穴住居の排水溝は、隣接する第1次調査区内のSD44であると思われる。

SH198の廃絶後、その北西にSH188a・bが建てられる。この竪穴住居の排水溝は、SH198の排水溝を西に延長して接続したと思われる。この竪穴住居は支柱穴が重複しており、建て替えを行い、比較的長く存続していたと考えられる。

SH188bの廃絶後、やや離れた位置にSH197が建てられる。排水溝は、SH188のものを延長して接続している。

その後、SH195が建てられる。排水溝は、SH197のものに合流させている。その排水溝は、隣接するSH197を避けるように迂回している。

さらにその西にSH133が作られる。この竪穴住居は、斜面下にSH197とSH195があったために、排水溝を住居隅から出すことができず、南辺の中央から溝を出し、SH197を避けるように迂回して排水溝を掘っている。

SH197-SH195-SH133の3棟は、一見同時に存在す

るようにも見えるが、SH197-SH195間で2.5m、SH195-SH133間で3mの距離しかなく、上部の構造を考えると同時存在は考えにくい。

その後、南に第3次調査SH77（以下㊦SH77と呼ぶ）が建てられる。そのためにSH133は排水溝を使えなくなり、SH133の排水溝は、SH195の排水溝を改修して、それに接続するように作り替えられる。この2棟間の距離は最も近い所で4mであるが、㊦SH77の建設に伴って排水溝を付け替えていることから、2棟は同時に存在していたと考えられる。また㊦SH77の排水溝は、これまでのSH133の排水溝を利用していたのかもしれない。

SH133の廃絶後、その北東にSH131a・bが建てられる。排水溝は、SH133のものを延長して接続している。SH131a・bは台地上では最も高い所にある。この竪穴住居は支柱穴が重複しており、建て替えを行い、比較的長く存続していたと考えられる。

群内で最も新しい住居はSH207である。排水溝はSH131の排水溝の一部を埋めて利用している。

A群では同時期1棟、最大2棟以内の竪穴住居が

丘陵を登るように建て替えられていったのであろう。
B群 B群は調査区の北東の東斜面にある。群内で最も古い住居は、SH56である。この住居の排水溝は、住居の東隅から外に出たところで1次調査SH20を避けるように屈曲している。また、前後関係は不明であるが、SH92の排水溝がSH56の排水溝に合流する。

SH56の廃絶後、SH85が建てられる。この住居の排水溝は不明であるが、SH56の排水溝を一部使用していたのかもしれない。

SH85の廃絶した後、重なるように方形周溝墓SX86とSX91が作られる。

次に、丘陵の上方にSH74とSH19が作られる。2棟の前後関係は不明である。これらの住居からの排水溝は、延々20m~30mも掘削し、かつてのSH56排水溝を改修して接続している。また排水溝は、方形周溝墓の墳丘を避けるように若干蛇行している。

以上、2か所の竪穴住居群をみてきたが、この結果、次のようなことが推察できる。

①A群で10棟、B群で6棟の竪穴住居があり、集中した竪穴住居群に見えるが、実際は竪穴住居が1~2棟の継続的な推移であること。

②竪穴住居の建て替えに際して、同じ場所を使っての建て替えは少なく、斜面のより上方に新しい住居を作る傾向がある。

また、竪穴住居の埋土の土層を観察すると、人工的に埋められたものはなく、いずれも自然堆積による埋没である。新しい住居に移り住んでも、その付近には、かつての竪穴住居の痕跡が窪地として残っていたようである。

③竪穴住居を作る領域が、低丘陵の東斜面に限定されており、狭い範囲で竪穴住居や廃棄された住居の窪地が飽和状態になっても、頂上を越えて西斜面に竪穴住居を作っていない。

また、建て替えに際しては、斜面の上方への移動は多いが、横方向への移動はあまりみられない。このことから、集団内には土地利用に関しての一定の規制があったようである。

④排水溝を共有する竪穴住居群内には、「溝を継続的に利用する」という意識が強くみられること。

B群では、これまでの排水溝に接続するため20m~30mにもわたり排水溝を掘削している。また、A

群のSH113とSH77の関係にみられるように、使われている排水溝を壊し、新たな排水溝を掘り直すという行為も行われている。これは群内に強い帰属意識があったことを示すのではないであろうか。

(3) 土師器焼成坑について

今回の調査では、土師器焼成坑を新たに11基検出した。したがって北野遺跡全体で検出された土師器焼成坑は合計225基になる。

土師器焼成遺構の研究は最近、全国的に盛んになりつつある。遺構の構造、焼成方法や生産体制などが議論されるようになってきたが、現状では不明な点も多い。ここでは、調査中・整理中に考えたことをまとめたい。

遺跡の分布と立地 本遺跡の周辺では、本年度新たに多気郡明和町上野の曾祢崎遺跡^⑮、度会郡玉城町世古のカリコ遺跡^⑯で土師器焼成坑が検出された。これらの分布をみると(第1図)、土師器焼成坑が検出された遺跡は低湿地には少なく、丘陵斜面や低丘陵に帯状に分布する傾向がある。特に本遺跡の立地する大字池村から有爾中・養村・明星・上野にかけての丘陵斜面や舌状にのびる低丘陵には、土師器焼成坑の検出された遺跡が密集する。

遺跡内での立地 土師器焼成坑は基本的には斜面に造られ、先端を斜面の低い方に向けて構築されることが多い。これは従来から指摘されてきたことであるが^⑰、今回の調査で検出されたSF186のように、先端を斜面の高い方に向けて構築されるものもある。

遺跡内での分布 本遺跡では、これまで225基が検出されているが、その分布には濃淡がある。今回の調査区は遺跡の中央部に当たり、地形的にもこれまでの調査区とあまり差がないにもかかわらず、土師器焼成坑の分布は比較的疎らであった。

土師器生産集落の中に、住居、工房、土師器焼成坑がそれぞれの領域を持っていたのかもしれない。土師器焼成坑の被熱部について 土師器焼成坑の壁面や床面には焼成時の熱によって赤変する部分がみられる(以下、被熱部と呼ぶ)。

さらに、被熱部には強く熱を受け、橙色に固く焼けている部分と、あまり熱を受けず、赤褐色に焼ける部分とがある(第11・12・13図)。

被熱部の分布をみると、奥壁と側壁には例外なく強く被熱する部分が見られるが、床面には強く被熱する部分が見られるもの(SF28・SF109・SF112・SF170・SF185)と、あまりないもの(SF186・SF189)がある。土師器焼成坑の上部の構造は、不明な点が多いが、単に地面に穴を掘り開放状態で焼成を行ったのではなく、奥壁や側壁に火がよく当たるような

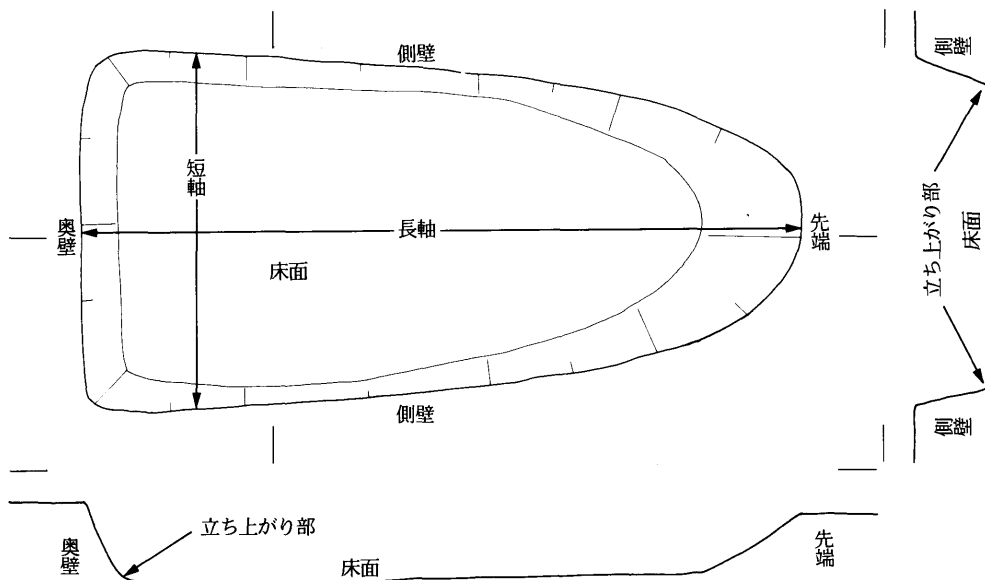
(註)

- ① 中野敦夫『明和町遺跡地図』(明和町教育委員会 1988年)
- ② 田村陽一「多気郡明和町菟村 北野遺跡」(『平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告 第2分冊』三重県埋蔵文化財センター 1991年)
- ③ 『三重県埋蔵文化財センター年報4』(三重県埋蔵文化財センター 1993年)
- ④ 『三重県埋蔵文化財センター年報5』(三重県埋蔵文化財センター 1994年)
- ⑤ 『三重県埋蔵文化財センター年報6』(三重県埋蔵文化財センター 1995年)
- ⑥ 遺構の数に関しては、第1次・第2次・第3次調査と一部重複する。第5次調査で新たに検出した遺構は、竪穴住居53棟、掘立柱建物47棟、土師器焼成坑11基、方形周溝墓3基である。
なお、個々については一覧表に示した。
- ⑦ 土師器焼成坑の各部の名称は下図(第21図)による。
- ⑧ 弥生土器・飛鳥～奈良時代の土器については、斎宮歴史博物館の上村安生氏の御教示を得た。

構造を持っていたのではないだろうか。

また、遺構の章でも述べたが、SF170やSF186の埋土には、焼土粒を多く含む粘土質の部分がある。これは土師器焼成坑の一時期の床面であった可能性があり、一基の土師器焼成坑の操業が複数回であることを示すものではないと思われる。

- ⑨ 上村安生「北野遺跡出土遺物概要について」(『古代の土師器焼成遺構について』窯跡研究会 1995年)
- ⑩ 天本洋一「北部九州の鐸形土製品について」(『佐賀考古』第1号 佐賀考古談話会 1994年)
- ⑪ 野本孝明「銅鐸形土製品考」(『東京考古』2 東京考古談話会 1984年)
- ⑫ 本遺跡から最も近い銅鐸出土地は、直線距離で約9km離れた、多気郡多気町の四疋田である。(『多気町史』通史 多気町史編纂委員会 1992年)
- ⑬ 調査区内の弥生時代後期～古墳時代初めの竪穴住居34棟中、23棟が排水溝を持つ。
- ⑭ 第1次調査ではSB20としていたが、本書の遺構略記号にしたがいSH20とした。
- ⑮ 西村美幸「曾祢崎遺跡発掘調査報告」(三重県埋蔵文化財センター 1996年)
- ⑯ 『三重県埋蔵文化財センター年報7』(三重県埋蔵文化財センター 1996年)
- ⑰ 上村安生「土師器焼成坑について」(『Mie History』vol. 6 三重歴史文化研究会 1993年)



第21図 土師器焼成坑の各部の名称

V. 北野遺跡（第5次発掘調査）の考古地磁気年代

富山大学理学部地球科学教室

広岡公夫、森京子

熱残留磁化

磁鉄鉱 (Fe_3O_4) や赤鉄鉱 (Fe_2O_3) など、土の中に含まれている磁性体を熱していくと、ある温度に近づくと、さきを持っていた磁化強度が急激に減少し、その温度で磁化を完全に失う。このような磁性を失う温度をキュリー点 (Curie point) といい、それぞれ鉱物の種類によって固有の温度となる。磁鉄鉱では578℃、赤鉄鉱では670℃である。少量のチタンが鉄と置き変わったチタン磁鉄鉱、チタン赤鉄鉱では、チタンの含有量が増えると低くなり、最高のものはチタンを含まない磁鉄鉱、赤鉄鉱のそれになる。キュリー点以上の温度では、これらの鉱物もはや磁性体ではないのである。

キュリー点以上の磁性を失った状態の高温から冷える逆の過程を見ると、キュリー点の温度になった瞬間に磁化を持つことができるようになり、磁性が蘇る。このときに獲得される磁化の方向は、作用している磁場（地球磁場）と同じ方向になり、磁化強度もその時の地球磁場強度に比例する。このようにして獲得された磁化を熱残留磁化 (thermo remanent magnetization、略して、TRM) という。陶磁器窯や土師器焼成坑のような焼土遺構は、窯が使われ、土が焼かれた当時の地磁気の方向と強さを熱残留磁化の形で記憶している。焼土の有する残留磁化は昔の地磁気を記憶している“地磁気の化石”なのである。

地磁気永年変化

地球磁場は、ゆっくりであるが、地磁気永年変化と呼ばれる時間変化をしているために、時代が異なると違った方向になる。したがって、焼かれた時代が異なると、当然、熱残留磁化の方向も違ってくる。考古学的な遺構や遺物が有する残留磁化を測定して、過去の地磁気の様子を明らかにする研究を考古地磁気学といい、多数の焼土遺構について測定がなされてきた。

北陸・東海地方から九州北部に至る西南日本各地の遺跡の考古地磁気学的研究によって、過去2000年間における西南日本の考古地磁気永年変化が、相当詳しくわかってきた。(Hirooka, 1971; 広岡, 1977; Hirooka, 1991)。

遺構の残留磁化の方向を、標準となる考古地磁気永年変化曲線と対照・照合することによって、その遺構ができた年代を求めることができる。この方法は遺構の種類によらず、同じ時代であれば磁化方向も同じになるはずであるので、異種遺構間の対比にも有効である。

明和町の土師器焼成坑についての考古地磁気学的測定は、北野遺跡では第1次調査(広岡ほか, 1991)から第4次調査まで全てについて行われている。更に、同様の焼成坑が多数発見されている戸峯古墳群、戸峯A遺跡などでも行われ、測定例は非常に多数にのぼっている。

試料の採集

第5次発掘調査で発掘された北野遺跡の土師器焼成坑の試料採集は、1996年1月に行われ、総計12基の窯跡から試料を得た。試料の残留磁化方向を詳しく知るためには、試料として採取した土が遺構内でのどのような方位になっていたかを正確に測る必要がある。方位測定の精度が年代測定の精度を大きく左右するのでできるだけ正確に測らなければならない。

窯跡や炉跡のようによく焼けて堅い塊が混じっている焼土の場合は、石膏で固めて表面を平にし、その表面の方位と傾きを測った後、取り上げる方法を用いる。焼土試料採集の手順は次のようになる。

まず、遺構中のよく焼けた部分を選んで、焼土が動かないように注意しながら、周りに数cmの深さの溝を掘り、こぼし大の焼土を削り出す。削りだした部分の土片や土埃をきれいに手箒で掃き除いてから、薄く溶いた石膏を削り出し部分全体にかけてくずれないように固定した後、その上面に濃く溶いた石

膏をのせ、アルミ板を押し付けて平面を作る。この平面は水平である必要はなく、傾斜していてもよい。

石膏が固化した後、アルミ板をはがし、考古地磁気試料採取のために特に改造した特製クリノコンパス(Hirooka, 1971)を用いて、石膏平面の最大傾斜線の方位(pitch)とその傾斜角(dip)を測り、その値を野帳に記録する。石膏平面上に方位を示すマーク(3点)と試料番号をマジックインキで記入する。焼土試料を窯跡から切り離し、試料の裏面にも石膏をかけて補強してから紙に包んで研究室に持ち帰る。

通常、このような手順で、遺構の大小にかかわらず1遺構から十数個の試料を採取する。持ち帰った試料は、ダイヤモンド・カッターで34mm×34mm×34mmの立方体に切断・成形し、切断面にも石膏をかけておく。

上記のような手順で採られた北野遺跡土師器焼成坑の採取試料の番号の一覧は第1表の通りである。

残留磁化測定

最初から試料が持っている残留磁化を自然残留磁化(natural remanent magnetization、略して、NRM)という。NRMには磁気的に変わり難い不安定な成分から磁化の方向や強さを容易に変えてしまう不安定な成分までいろいろなものが含まれてる。不安定な磁化成分の中には、熱残留磁化獲得時から現在までの長い埋積期間中に、焼土自身の磁化が作る磁場や絶えず作用している地球磁場の影響を受けて、磁化方向を変えてしまっているものもある。このような不安定成分は、真の地磁気の化石とはいえないので、消去しなければならない。

この不安定成分を実験的に消去する方法が交流消磁法である。段階的に消磁磁場を高めて、不安定な磁化成分から順に消すことができる段階交流消磁実験を丁寧に行えば、より安定で過去の地磁気の忠実な記録である残留磁化の成分を選び出すことができる。焼かれた温度が低い熱残留磁化には不安定な成分が多くなる傾向がある。

残留磁化の測定には夏原技研製のリングコア型スピナー磁力計(S S M-85型)を使用し、試料を6回置き直す方法で行った。

交流消磁実験には夏原技研製の2軸回転型交流消

磁装置(DEM-8601G型)を用いた。

まず、各試料について、個々の試料のNRMの磁化方向と磁化強度を測定した後、不安定な成分を洗い流して過去の地磁気の記録となっているしっかりした安定な磁化成分だけを選び出すために、段階交流消磁実験を行った。消磁の各段階ごとに残留磁化の測定を行って、磁化方向と強度の変化を追う。今までの例で土師器焼成坑の残留磁化の不安定成分は25 Oe(2.5mT)~100 Oe(10mT)で効果的に消去されることが、経験的にわかっているので、25、50、75、100、150 Oeの5段階を設定し、焼成坑ごとの磁化の変化に応じて4~5段階で消磁した。磁化方向のまとまりが最も良くなる段階を最適消磁段階として、そのときの測定結果を考古地磁気データとして採用した。

各段階の個々の試料の測定結果を全部採録すると膨大になるので、最適消磁段階の磁化測定結果だけを第2~13表に示す。

測定した残留磁化ベクトルは偏角・伏角・磁化強度で表される。偏角は、磁化の方向を水平面に投影したときの真北からの振れの角度を表し、東偏を正にとる。伏角は磁化方向の水平からの傾斜角を示す。よく焼かれた通常の陶磁器窯跡の場合の磁化強度は 10^{-3} ~ 10^{-4} (e. m. u./g)の値になるが、焼けの悪い場合には磁化は弱くなり、 10^{-5} あるいは 10^{-6} まで落ちることがある。磁化強度は焼け具合の目安となる。

同一遺構から採られた試料の大多数の磁化方向のまとまりがよい場合でも、若干数の試料の磁化方向が大きく外れる場合がよくある。このような現象は、温度が十分に上がっていない部分を採取したり、試料採取の際の方位測定に誤りがあったり、あるいは、磁化獲得後にその部分が機械的に動いて磁化方向が外れたりしたときに見られるもので、真の地磁気の記録とはいえないのである。したがって、その遺構の平均磁化方向を求める計算ではこのような試料のデータは除外する。表中に*印を付けてあるのが、このような外れた磁化方向を示す試料であり、平均磁化方向を求める統計処理の際に除外されたものであることを示している。

平均磁化方向と磁化のばらつきの大きさを求める

統計計算には、フィッシャーの方法 (Fisher, 1953) を用いる。この統計計算では、平均偏角・平均伏角・95%レベルのフィッシャーの信頼角 (α_{95})・フィッシャーの精度係数 (K) および平均磁化強度が求められる。

α_{95} および K はともに同一遺構から得られた試料の残留磁化方向が、どのくらいばらついているかを示すもので、試料個数を n 、試料の磁化ベクトルをユニット・ベクトルと考えて、同一遺構の試料全部を足し合わせた合ベクトルの大きさを R とすると、 α_{95} は次式で与えられる。

$$\alpha_{95} = \cos^{-1} [1 - \{(n - R)/R\} \{(0.05)^{-1/(n-1)} - 1\}]$$

α_{95} は、平均磁化方向 (平均偏角・平均伏角) のまわり $\pm \alpha_{95}$ の範囲内に真の磁化方向が 95% の確率で存在することを示している。測定試料数が多くなるほどその平均磁化方向の信頼度が高くなるので、同一遺構からの試料数が多くなるほど、 α_{95} の値は小さくなる。試料数は多ければ多いほど信頼度は上がるが、試料の採取とその測定に要する時間も膨大になるので、それらの条件との兼ね合いで、通常、上記のように 1 遺構から 12 個程度の試料を採取することにしている。よく焼けた窯跡の場合 (十分な熱残留磁化を獲得している場合) には、磁化のばらつきが多少大きなものでも、 α_{95} は 3° 以内におさまる。

また、K は、次の式で示されるような個々の試料の磁化方向の平均的なばらつきを度を表すパラメーターである。

$$K = (n - 1) / (n - R)$$

この値が大きいほどばらつきが少ないことを意味し、通常よく焼かれた焼土遺構では 500 以上の値となる。この値は試料の数には関係なく、その遺構の個々の試料の磁化方向のばらつきがどの程度であるかを示している。個々の試料の磁化ベクトルを単位ベクトルと考えているので、フィッシャーの統計には磁化強度の項は入っていないが、先に述べたように、よく焼かれて十分な熱残留磁化を獲得した試料は、 10^{-3} emu/g 前後の磁化強度を持つので、磁化強度は、焼けの状態を知る目安を与える。

統計計算の結果は第 14 表に示されている。この表には交流消磁の各段階で得られた統計計算結

果が示されており、その中で最もまとまりのよい最適消磁段階のものを採用した。表中の () がついているものは、最適消磁段階でないために、考古地磁気データとしては採用しなかったものであることを示している。

12 基の土師器焼成坑のうち、 α_{95} が 1° 台のものが、9 基、2° 台が 2 基、3 台が 1 基となっており、非常に磁化方向のまとまりのよいものが多いことがわかる。

考古地磁気推定年代

第 1 図には、西暦紀元から 1950 年までの西南日本の考古地磁気永年変化曲線 (広岡, 1977) が描かれている。この図には第 14 表の考古地磁気データもプロットされている。白丸が 50 年毎の地磁気の方向を表し、黒丸印が各焼成坑の最適消磁段階の平均磁化方向で、それを囲む円が α_{95} の範囲を示している。この永年変化曲線が過去の地球磁場変動を正しく表しているものとの前提に立つと、永年変化曲線上の黒丸印がのっている部分の年代値が考古地磁気学的に推定される年代であり、 α_{95} の円に覆われる永年変化曲線の線分の長さが推定値の年代幅を与える。地磁気の変動の速度は時代によって変わるので、 α_{95} が同じ値であっても年代幅は異なる場合がある。

SF57 を除く 11 基は、全て偏角が -15° 前後で、伏角は、 43° から 58° までの範囲に分布する。これは 6 世紀前半から 7 世紀前半の地磁気の特徴に一致している。伏角の違いは時代の差を表しているのであろう。ただし、8 世紀末から 10 世紀までは、6 世紀と地磁気の方法が非常に似ているので、伏角が浅いもの (SF109、208、112、186、183、184、28、39) は、考古地磁気学的には、8 世紀末から 10 世紀になる可能性もある。また、これらのうち、SF109 や SF208 のように特に伏角が浅い場合には、1 世紀代の可能性も出てくる。伏角が深いもの (SF189、170、185) は 6 世紀末から 7 世紀初頭のものとおもわれる。

先に除外した SF57 の磁化方向は、上に述べた 11 基の焼成坑とは磁化方向が大きく異なり、著しい東偏偏角 ($+19.7^\circ$) を示し、時代が全く違っていることを示唆している。東偏偏角で深い伏角は、3

世紀末～4世紀初頭が13世紀の特徴である。SF57はこのどちらかの時代のものと考えられる。

第1図から推定される各遺構の考古地磁気年代推定値は、次のようになる。

SF 28	A.D.570±10年 又は A.D.780±20年
SF 39	A.D.775±25年 又は A.D.570±20年
SF 57	A.D.300±20年 -40年 又はA.D.1280±40年
SF 109	A.D.20±15年 又はA.D.900±50年 又はA.D.520±20年
SF 112	A.D.880±20年 又はA.D.540±10年
SF 170	A.D.605±25年

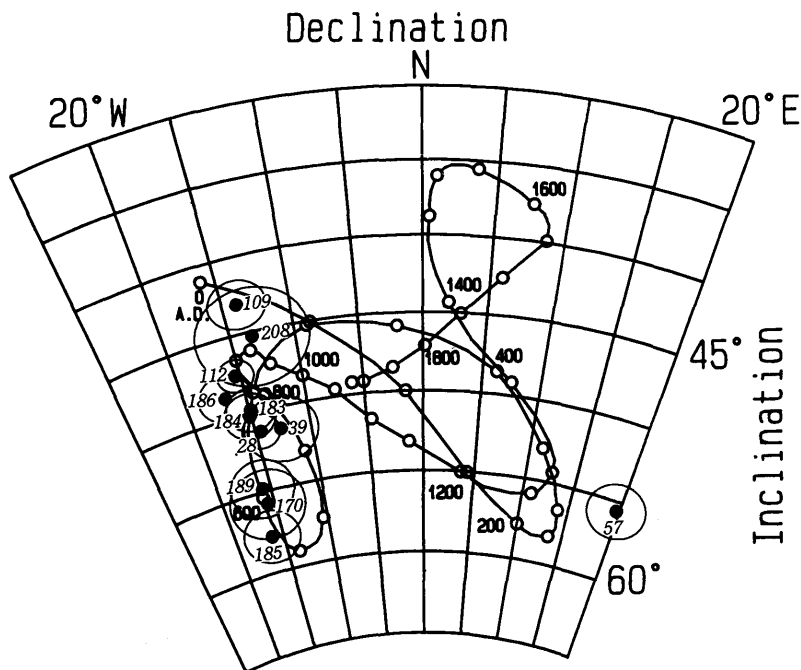
SF 183	A.D.560±15年 又はA.D.800±20年
SF 184	A.D.560±20年 又はA.D.795±25年
SF 185	A.D.630±20年
SF 186	A.D.555±15年 又はA.D.825±25年
SF 189	A.D.600±20年
SF 208	A.D.900±90年 又はA.D.525±25年 又はA.D.25±25年

上記の年代のうち、2つ以上の年代値が記されているものは、一応先に上げた順に考古地磁気学的には確率が高いことになるが、永年変化曲線の不確かさが含まれているので、これらの年代値のうち、考古学的知見と矛盾しない年代値を採用すればよい。

引用文献

R.A.Fisher (1953) Dispersion on a sphere, Proceedings of Royal Society of London, Series A, vol. 217, 295-305.
 Kimio Hirooka (1971) Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in Southwest Japan, Memoirs of Faculty of Science, Kyoto University, Series of Geology & Mineralogy, vol.38, 167-207.

広岡公夫 (1977) 考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向、第四紀研究、vol.15,200-203.
 Kimio Hirooka (1991) Quaternary pelemagnetic studies in Japan, The Quaternary Res. (第四紀研究)、vol.30, 151-160.
 広岡公夫、田中豊、森定尚 (1991) 北野遺跡土師器焼成坑群の考古地磁気測定、「平成2年農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告」、第2分冊、三重県埋蔵文化財調査報告94-2、三重県埋蔵文化財センター21-26.



第1図 北野遺跡（第5次調査）の考古地磁気測定結果と西南日本の考古地磁気永年変化（広岡、1977による）。

28:SF28、	39:SF39、
57:SF57、	109:SF109、
112:SF112、	170:SF170、
183:SF183、	184:SF184、
185:SF185、	186:SF186、
189:SF189、	208:SF208、
Declination:偏角、	Inclination:伏角、

第1表 北野遺跡(第5次発掘調査)の考古地磁気試料番号一覧

遺構名	試料番号
S F 2 8	NM 7701 ~ 7716
S F 3 9	NM 7741 ~ 7752
S F 5 7	NM 7721 ~ 7732
S F 1 0 9	NM 7521 ~ 7539
S F 1 1 2	NM 7541 ~ 7556
S F 1 7 0	NM 7681 ~ 7694
S F 1 8 3	NM 7561 ~ 7573
S F 1 8 4	NM 7581 ~ 7593
S F 1 8 5	NM 7601 ~ 7614
S F 1 8 6	NM 7621 ~ 7638
S F 1 8 9	NM 7641 ~ 7656
S F 2 0 8	NM 7661 ~ 7672

第2表 S F 2 8 の 100 Oe 消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
NM 7701	-10.2	52.7	0.403
7702	-14.6	50.8	1.25
7703	-15.5	50.4	4.29
7704	-15.0	49.6	4.16
* 7705	- 4.9	52.9	2.40
7706	-13.4	51.3	6.66
* 7707	-24.7	51.0	6.88
7708	-15.7	49.3	4.01
7709	-13.8	52.3	4.36
* 7710	-18.6	46.9	6.36
* 7711	- 6.4	51.5	0.246
7712	-15.8	53.7	4.95
* 7713	-20.4	54.5	3.04
7714	-15.7	52.4	1.56
7715	-15.4	50.5	1.33
* 7716	-9.8	46.8	1.24

*: 統計計算の際に除外したもの。

第3表 S F 3 9 の 50 Oe 消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
NM 7741	-12.3	53.6	0.454
7743	-11.0	53.8	0.588
7744	-14.0	50.5	10.3
* 7745	-12.6	62.5	3.99
* 7746	-21.7	44.9	1.17
7747	-15.0	49.2	8.97
7748	-13.4	48.6	6.39
* 7749	- 4.7	66.0	1.11
7750	- 8.1	54.1	0.377
7751	-16.9	48.4	6.80
7752	- 9.9	52.9	7.05

*: 統計計算の際に除外したもの。

第4表 S F 5 7 の 100 Oe 消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
*NM 7721	-158.9	454.9	5.06
7722	23.0	55.5	8.40
7723	22.9	54.2	5.53
7724	16.8	57.7	1.85
7725	16.1	54.3	14.0
7726	19.5	59.3	11.1
7727	18.0	55.0	1.53
7729	15.6	55.0	6.72
7730	23.8	53.0	1.48
7731	21.1	56.1	4.66
* 7732	27.2	59.9	6.72

*: 統計計算の際に除外したもの。

第5表 S F 1 0 9 の 100 Oe 消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
NM 7521	-16.5	43.3	0.610
7522	-15.1	41.6	0.975
7523	-14.1	41.6	4.68
7524	-11.5	42.4	0.926
* 7525	6.3	28.8	0.120
* 7526	- 6.2	39.4	0.388
* 7527	- 0.2	48.8	0.211
* 7528	-27.7	55.0	1.65
* 7529	-13.5	30.6	1.07
7530	-15.1	43.3	0.591
* 7531	-26.6	47.7	2.08
* 7532	-26.7	47.7	0.130
7533	-14.1	39.2	0.262
* 7534	-27.4	46.2	0.350
* 7535	78.7	45.1	7.13
7536	-12.3	44.2	0.951
7537	-12.6	46.8	3.58
* 7538	-18.9	48.3	2.14
7539	-13.7	45.2	4.35

*: 統計計算の際に除外したもの。

第6表 S F 1 1 2 の 100 Oe 消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
NM 7541	-15.1	47.4	7.18
* 7542	-32.0	49.1	6.10
7543	-17.6	45.5	4.29
7544	-14.6	46.6	3.30
7545	-14.7	49.0	1.06
7546	-14.0	49.2	2.53
7547	-15.9	47.9	6.07
7548	-11.6	45.8	5.81
7549	-16.0	47.8	3.65
7550	-18.7	50.5	5.65
7551	-13.7	46.4	13.4
7553	-13.0	45.6	8.00
7554	-15.2	46.5	5.77
7555	-18.5	48.2	4.51
7556	-17.8	48.6	8.28

*: 統計計算の際に除外したもの。

第7表 S F 1 7 0 の 75 Oe 消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
*NM 7681	-79.8	29.0	0.807
* 7682	14.4	42.4	0.882
* 7683	69.0	56.0	0.669
* 7684	50.6	61.3	0.918
* 7685	21.4	38.5	0.0966
7686	-12.3	58.0	1.64
* 7687	-4.0	73.3	0.338
7688	-19.5	52.8	2.23
7689	-12.0	56.8	1.50
7690	-19.2	54.9	3.76
7691	-23.4	54.6	3.12
7692	-14.5	56.3	1.98
7693	-13.3	54.9	1.09
7694	-10.4	57.7	0.764

*: 統計計算の際に除外したもの。

第8表 SF183の100 Oe 消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
NM 7561	-13.6	49.4	0.328
7563	-16.5	51.7	0.112
7564	-19.6	50.5	0.184
7565	-13.5	49.2	0.168
7566	-12.6	49.7	0.154
* 7567	-25.0	49.8	0.119
* 7568	-21.6	52.8	0.151
7569	-15.2	50.6	1.47
7570	-15.3	47.0	1.04
7573	-13.5	50.1	0.801

*: 統計計算の際に除外したもの。

第11表 SF186の100 Oe 消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
NM 7622	-14.9	45.7	2.23
7623	-17.6	50.7	0.143
7624	-18.3	49.2	2.63
7625	-16.9	44.4	1.18
* 7626	-15.2	35.8	0.441
7627	-14.9	47.2	2.2
7628	-19.0	49.5	0.0913
7629	-15.2	50.8	0.456
7630	-17.1	50.3	0.0634
7631	-17.4	46.8	0.0701
* 7632	-11.1	43.5	0.0621
* 7633	-10.0	49.8	0.0710
* 7634	-9.3	52.8	0.178
* 7635	2.5	49.2	0.137
7636	-19.1	52.1	0.509
7637	-14.1	49.1	0.187

*: 統計計算の際に除外したもの。

第9表 SF184の75 Oe 消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
NM 7581	-14.2	54.4	2.02
7582	-14.7	48.3	5.95
7583	-16.9	49.3	1.05
7584	-18.0	50.6	1.08
7585	-13.1	51.6	0.328
7586	-15.1	49.1	5.18
* 7587	-113.8	49.8	7.58
7588	-15.1	48.3	2.71
7589	-15.9	49.4	6.05
7590	-17.3	52.4	3.14
7591	-10.6	48.9	8.43
* 7592	-124.5	54.1	1.10
* 7593	-117.5	51.2	6.04

*: 統計計算の際に除外したもの。

第12表 SF189の100 Oe 消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
NM 7641	-7.9	54.8	0.458
* 7642	-10.5	62.6	0.195
7644	-16.1	52.7	0.0945
7645	-14.0	55.3	0.210
7646	-17.5	52.2	0.529
7647	-19.2	55.8	0.269
7648	-10.7	52.9	0.198
7649	-19.1	57.0	0.857
* 7650	-120.6	55.2	0.876
7651	-18.7	58.0	0.194
* 7652	-111.1	51.2	8.27
7653	-20.0	55.7	0.0864
* 7654	-52.0	41.3	0.0618
* 7655	-8.6	44.8	0.165
7656	-15.3	53.2	0.386

*: 統計計算の際に除外したもの。

第10表 SF185の100 Oe 消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
*NM 7601	-24.8	62.4	1.85
7603	-13.7	57.9	0.954
7604	-18.0	60.1	5.34
7605	-12.7	55.1	3.77
7606	-20.3	55.6	0.836
7608	-12.8	61.3	0.578
7609	-20.0	58.5	1.10
7610	-18.0	55.5	2.90
7611	-16.9	53.8	10.0
7612	-14.2	58.5	5.55
7613	-13.6	60.1	4.31
7614	-17.4	59.0	1.47

*: 統計計算の際に除外したもの。

第13表 SF208の100 Oe 消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
NM 7661	-16.3	44.1	2.27
7662	-15.6	46.9	2.37
7663	-12.8	43.4	4.88
7664	-10.9	45.2	3.14
7665	-13.3	38.4	1.27
* 7666	-4.3	53.3	0.154
* 7667	-100.4	50.7	0.271
* 7668	-56.0	37.6	0.355
* 7669	3.0	51.8	0.137
7670	-10.4	48.5	0.139
* 7671	8.1	42.2	0.206
7672	-14.0	50.6	0.269

*: 統計計算の際に除外したもの。

第14表 北野遺跡(第5次発掘調査)土器焼成坑の考古地磁気測定結果

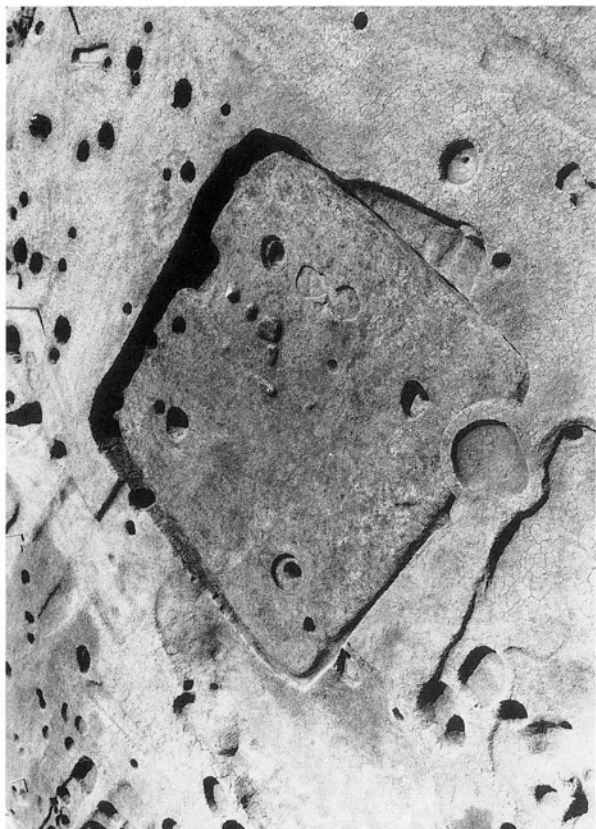
遺構名	消磁段階	N	D (° E)	I (°)	α_{95} (°)	K	平均磁化強度 ($\times 10^{-4} \text{emu/g}$)
SF28	(NRM	15	-14.1	54.2	1.93	391.6	5.12)
	(25 Oe	16	-14.7	53.4	1.78	431.3	5.29)
	(50 Oe	16	-14.7	52.7	1.65	501.8	4.78)
	(75 Oe	12	-14.7	52.0	1.15	1421.5	3.75)
SF39	100 Oe	10	-14.5	51.3	1.07	2054.7	3.30)
	(NRM	10	-11.3	55.8	4.18	134.5	5.68)
	(25 Oe	10	-11.9	55.9	4.40	121.4	5.12)
	50 Oe	8	-12.7	51.4	2.08	709.6	5.12)
SF57	(75 Oe	7	-11.9	49.6	2.34	664.6	5.06)
	(100 Oe	7	-12.4	50.5	2.58	546.9	3.19)
	(NRM	10	20.5	57.2	1.91	643.3	9.59)
	(25 Oe	9	19.6	56.9	2.42	453.9	9.25)
SF109	(50 Oe	10	20.8	56.5	2.02	571.7	8.55)
	(75 Oe	10	20.5	55.8	1.79	731.5	7.50)
	100 Oe	9	19.7	55.6	1.68	939.8	6.14)
	(NRM	16	-11.3	50.7	2.21	279.5	3.25)
SF112	(25 Oe	18	-14.4	49.0	2.45	200.6	2.63)
	(50 Oe	16	-15.9	48.4	2.15	296.3	2.50)
	(75 Oe	10	-14.0	45.8	2.05	555.8	2.36)
	100 Oe	9	-13.9	43.1	1.59	1049.0	1.88)
SF170	(NRM	14	-15.2	49.4	1.34	876.7	7.73)
	(25 Oe	14	-14.7	48.8	1.29	956.3	7.46)
	(50 Oe	14	-15.1	48.3	1.02	1513.1	7.20)
	(75 Oe	14	-15.0	48.0	1.03	1499.3	6.55)
SF183	100 Oe	14	-15.4	47.5	1.02	1522.4	5.68)
	(NRM	8	-11.5	59.2	3.00	342.9	2.97)
	(25 Oe	6	-16.0	56.8	2.62	653.8	2.52)
	(50 Oe	8	-17.5	56.1	2.35	557.7	2.45)
SF184	75 Oe	8	-15.7	55.8	2.14	673.1	2.01)
	(100 Oe	7	-18.5	56.4	2.26	716.4	1.56)
	(NRM	10	-16.2	54.4	3.14	237.3	0.969)
	(25 Oe	10	-16.5	55.1	2.63	338.5	0.845)
SF185	(50 Oe	10	-15.5	54.0	2.35	421.8	0.724)
	(75 Oe	9	-14.4	52.7	1.74	875.2	0.508)
	100 Oe	8	-14.9	49.8	1.37	1644.8	0.532)
	(150 Oe	7	-16.2	50.7	2.02	894.1	0.354)
SF186	(NRM	8	-16.0	52.4	2.45	514.1	5.01)
	(25 Oe	10	-13.1	51.7	2.15	503.9	4.55)
	(50 Oe	10	-14.0	50.8	1.49	1054.0	4.20)
	75 Oe	10	-15.1	50.2	1.45	1103.5	3.59)
SF189	(100 Oe	9	-16.9	49.3	1.51	1163.6	2.35)
	(NRM	12	-17.6	59.6	1.98	482.2	4.49)
	(25 Oe	11	-15.6	58.2	1.93	563.0	4.50)
	(50 Oe	9	-15.9	57.8	1.89	742.9	4.34)
SF208	(75 Oe	11	-16.8	57.7	1.74	691.6	3.94)
	100 Oe	11	-16.2	57.8	1.61	805.5	3.35)
	(NRM	14	-15.1	54.6	3.62	121.7	1.45)
	(25 Oe	14	-12.6	53.5	2.78	205.0	1.39)
SF189	(50 Oe	13	-14.1	50.3	2.02	420.4	1.31)
	(75 Oe	12	-14.5	49.1	1.88	532.6	1.10)
	100 Oe	11	-16.7	48.7	1.49	937.1	0.887)
	(NRM	7	-32.3	56.5	3.32	332.0	1.15)
SF208	(25 Oe	8	-39.1	60.1	3.77	217.2	0.849)
	(50 Oe	14	-21.6	59.3	2.57	240.5	0.509)
	(75 Oe	13	-15.5	56.2	2.37	306.8	0.402)
	100 Oe	10	-15.8	54.8	1.80	721.7	0.328)
SF208	(150 Oe	11	-13.4	55.1	3.83	143.0	0.154)
	(NRM	9	-20.5	53.5	7.28	50.9	3.39)
	(25 Oe	9	-12.4	51.0	4.20	151.2	2.81)
	(50 Oe	8	-10.6	51.2	3.93	200.0	2.54)
SF208	(75 Oe	7	-9.6	48.0	3.69	268.6	2.43)
	100 Oe	7	-13.3	45.3	3.16	365.8	2.05)
	(150 Oe	9	-12.9	49.3	5.18	99.7	0.797)

N : 試料個数、D : 平均偏角、I : 平均伏角 α_{95} : フィッシャーの信頼角、K : フィッシャーの精度係数。

() は年代推定のための考古地磁気データとして採用しなかったものを示す。



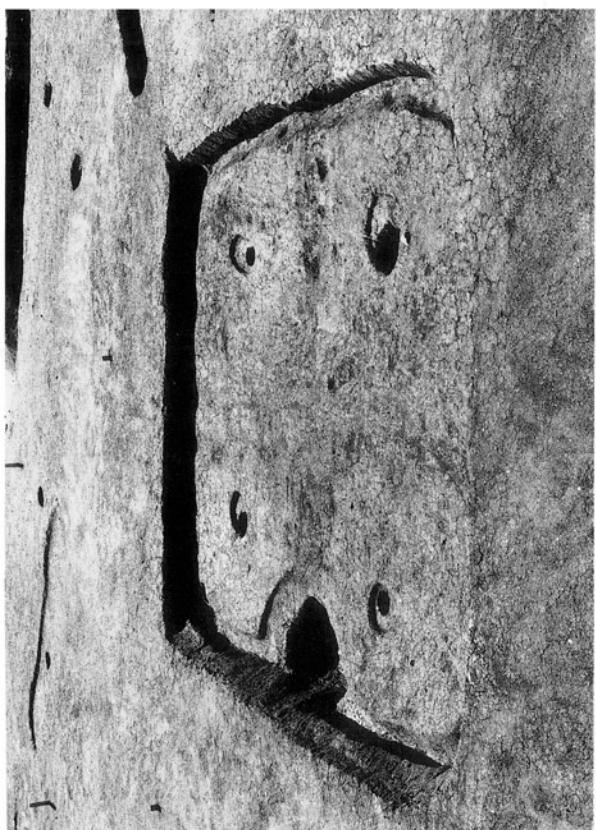
調査区全景



SH56 西から



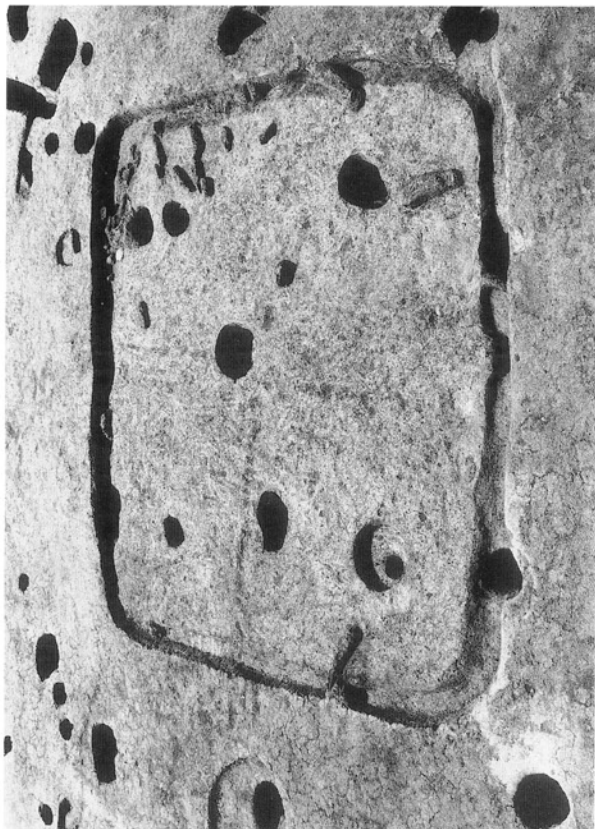
銅鐸形土製品25 出土状況



SH6 東北から



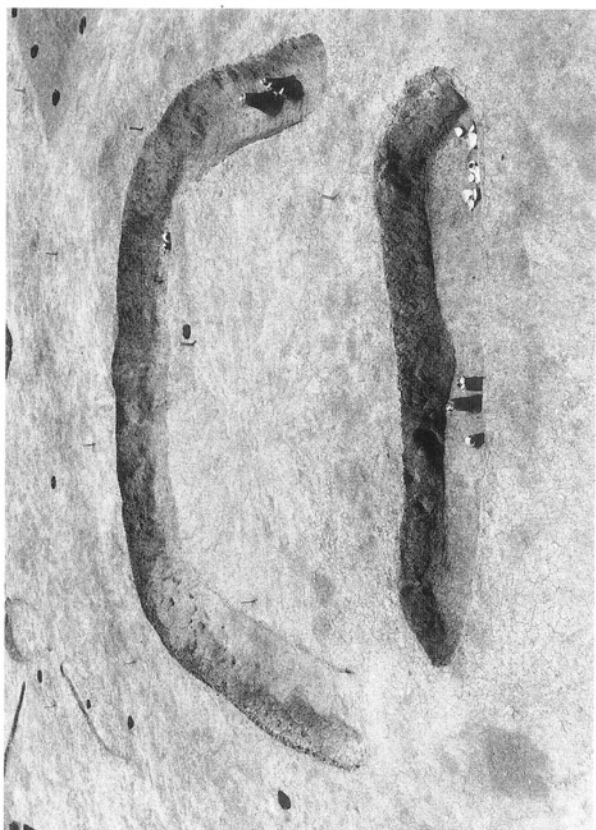
銅鐸形土製品24 出土状況



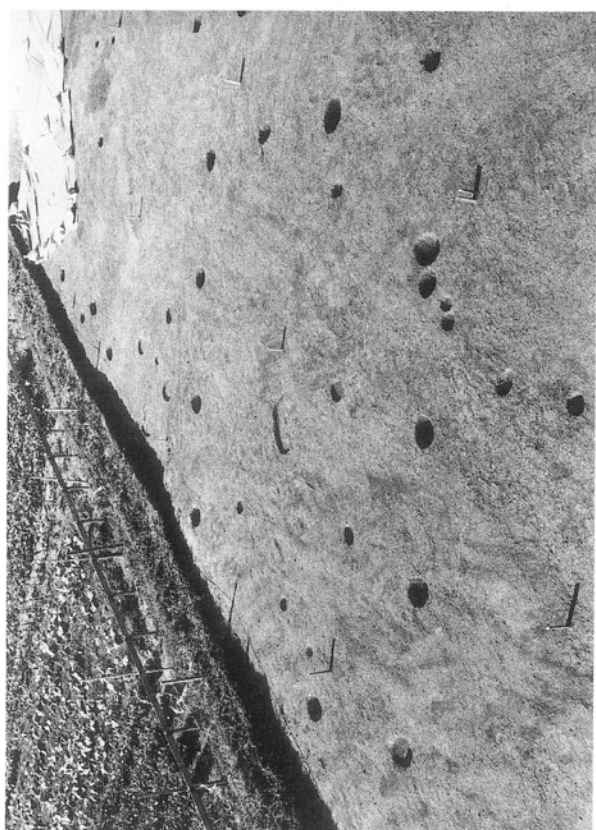
SH19 北から



SB120 南東から



SX5 北西から

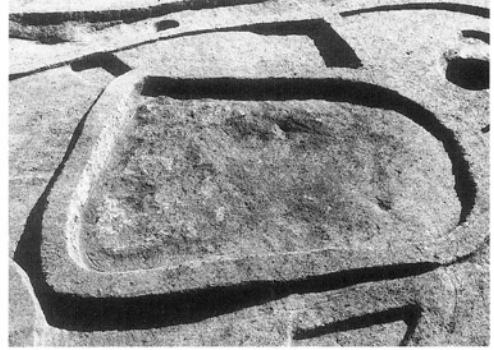


SB98 南東から

写真図版 4



S F 28 北東から



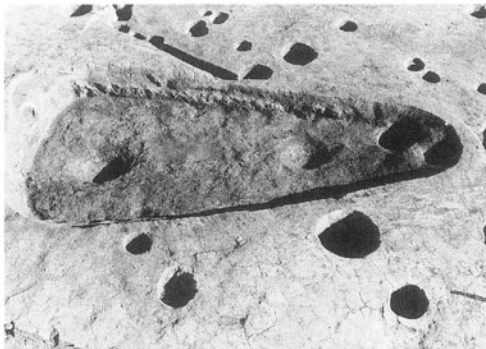
S F 109 南から



S F 112 東から



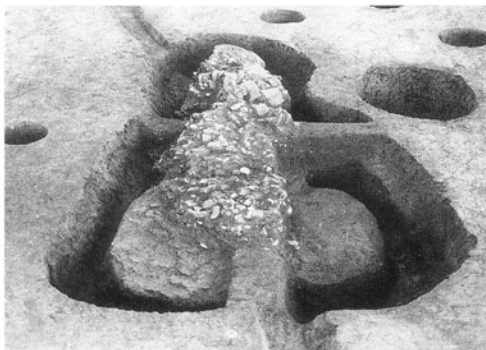
S F 170 第9層上面 南東から



S F 185 南から



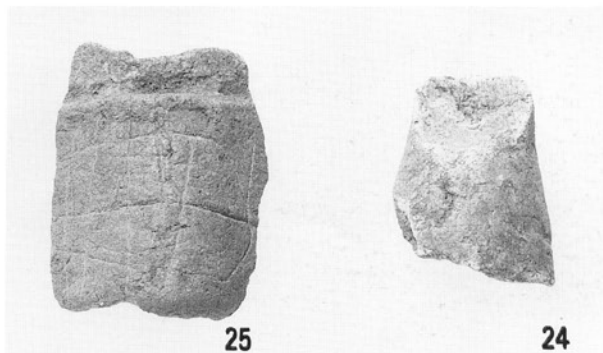
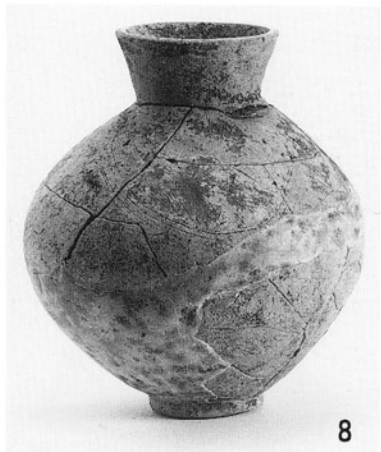
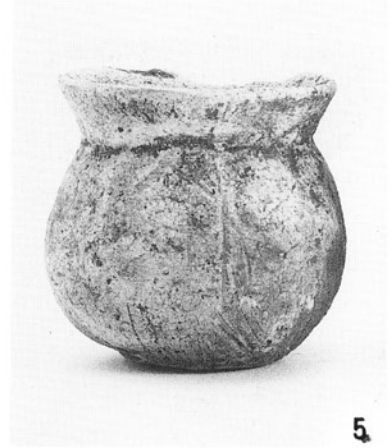
S F 186 北から



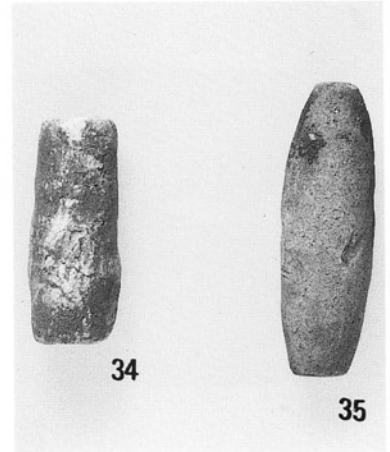
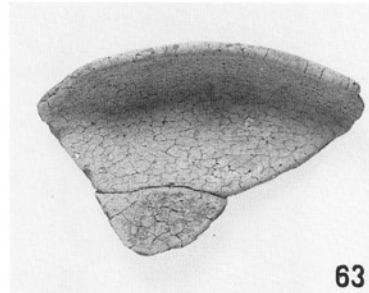
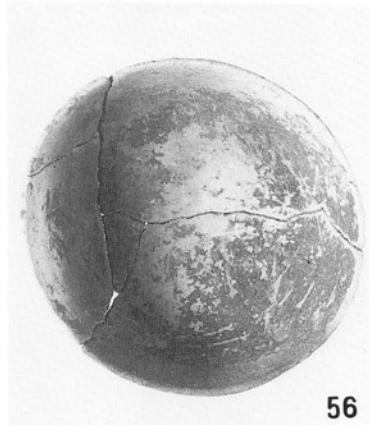
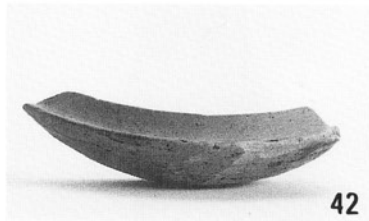
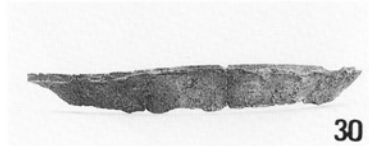
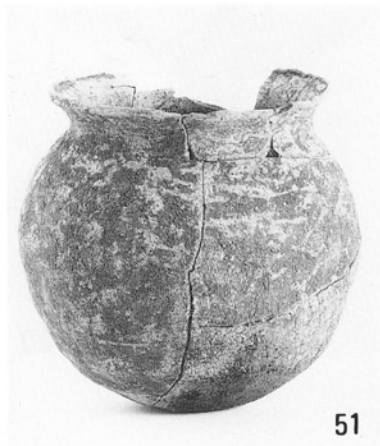
S F 189 西から



S F 189 東から



出土遺物(1) (24・25のみ 1 : 2)



報告書抄録

ふりがな	きたの いせき はくつちようさ かいほう							
書名	北野遺跡(第5次)発掘調査概報							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	133-5							
編著者名	竹田憲治、広岡公夫							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-03 三重県多気郡明和町竹川503番地 TEL 05965-2-1732							
発行年月日	西暦 1996年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きたの いせき 北野遺跡	みえけんた きぐんめいわらよう 三重県多気郡明和町 みのむらあざひがし 養村字東へべら他	24442	228	34度 31分 20秒	136度 37分 40秒	19950629~ 19960118	5,750	平成7年度県営 ほ場整備事業 (明星地区)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
北野遺跡	集落 その他の 生産遺跡	弥生時代 飛鳥時代 奈良時代	竪穴住居61棟 堀立柱建物48棟 土師器焼成坑12基 方形周溝墓3基		弥生土器 銅鐸形土製品 土師器 須恵器		全国最大の土師器生産 遺跡	

平成8(1996)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年6月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告133-5

北野遺跡（第5次）発掘調査概報

1996年3月

編 集 三重県埋蔵文化財センター
発 行
印 刷 東海印刷株式会社